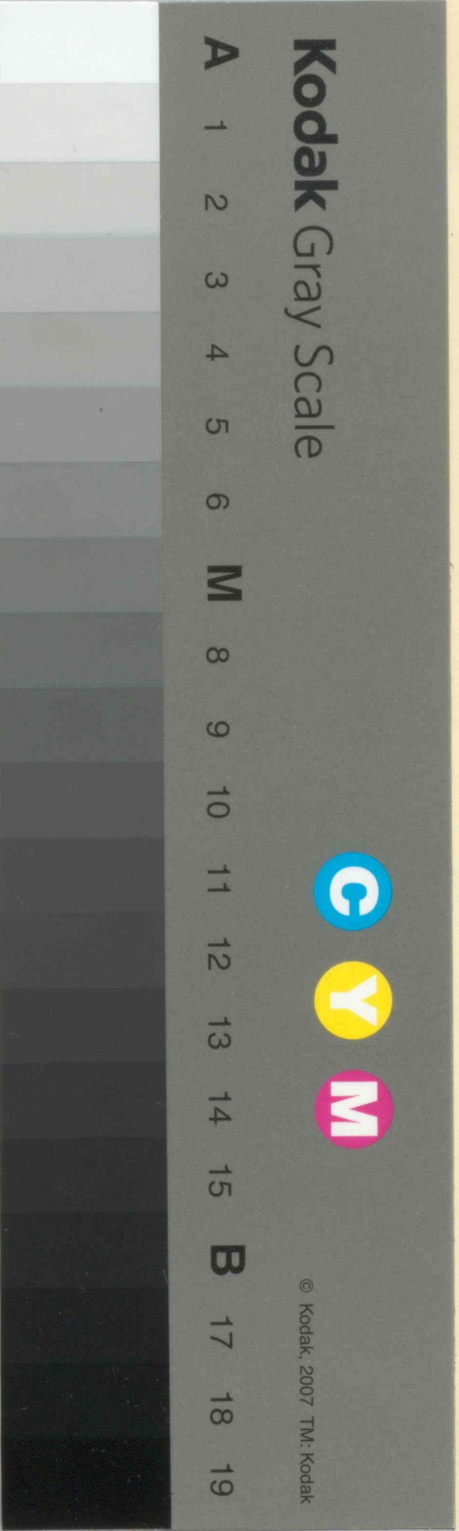
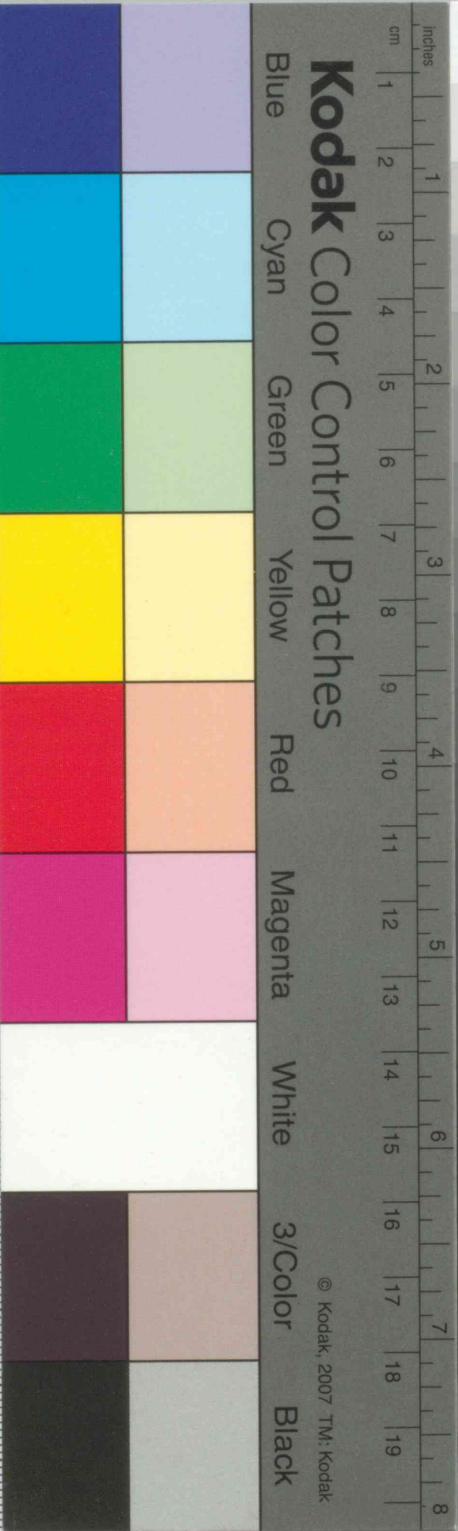
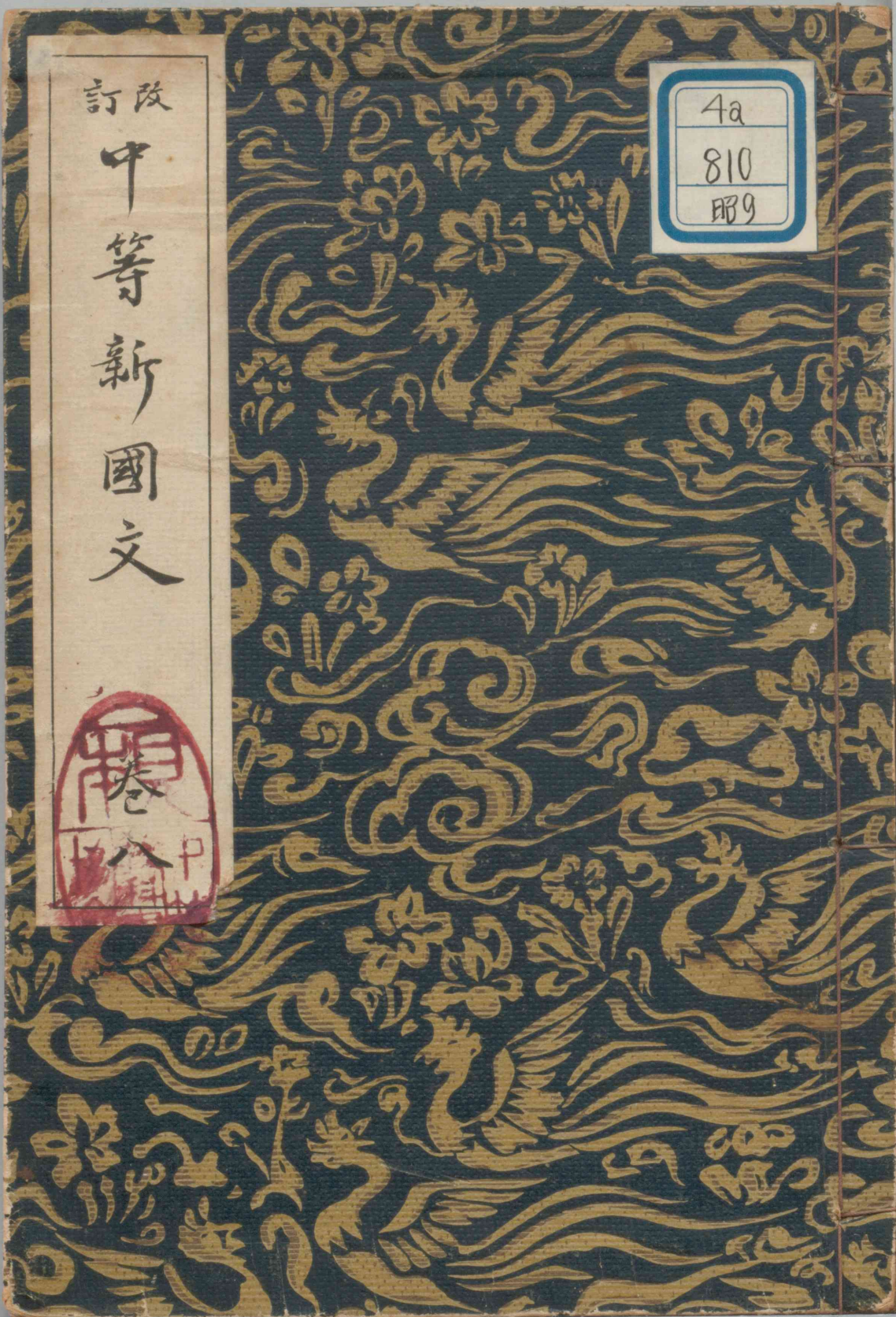


訂改
中等新國文



4a
810
P89



41728
教科書文庫
4
810
41-1934
20000
67128



資料室

42
810
BB9

濟定檢省部文

書科教科文漢語國校學中 日二十月一十年九和昭

書科教科語國校學業實 日一十二月一十年九和昭

訂改中等新國文

東京帝國大學教授 藤村作
東京帝國大學講師 島津久基
文學博士

共編



東京 至文堂

訂改中等新國文 卷八

目次

一	自由創造の精神	田澤義輔	一
二	秋のこゝろ外二篇	綱島梁川	六
三	伊勢物語		九
四	倫敦塔	夏目漱石	二六
五	平家雜感	高山樗牛	三二
六	忘れ難き日	姊崎嘲風	三九
七	擬古文三章	春海・濱臣・廣足	三三
八	石彫獅子の賦	薄田泣菫	三六
九	薩摩守	(狂言)	四〇

目次

一〇	光頼卿參内	平治物語	五
一一	草箒	永井荷風	六
一二	浅茅が原	平家物語	七
一三	うた日記抄	森鷗外	七〇
一四	乃木將軍	眞山青果	七六
一五	能は歌よみ	古今著聞集	一〇四
一六	古今集の歌	古今集	一〇七
一七	藝能雑話	十訓抄	一一〇
一八	建國の歌	北原白秋	一二五
一九	鉢木	謠曲	一二八
二〇	諺	藤井紫影	一三三
二一	川柳點	金子元臣	一四二
二二	梅	藤岡作太郎	一四七

二三	菅公	大鏡	一五二
二四	流泉啄木	今昔物語	一五七
二五	眞の學人	得能文	一六二

訂改中等新國文 卷八

一 自由創造の精神

田澤義鋪

田澤義鋪
佐賀縣の人
法學士
日本青年館理事

わが國民性には、長所の、どこまでも維持すべきものが少くないが、又短所の、如何にしても改めなければならぬものもある。長所の隨一は、國家が一大事に遭遇すると、一道の靈光が、胸より胸に傳はつて、國民は悉く共通の感激に燃えたつことである。次は一度意氣に感ずれば、成敗を論ぜず、利害の打算を超越して、情誼に殉じて悔いざることである。又簡素の趣味を愛し、物質的慾望に、比較的淡泊であり得るが如きも、亦たしかにわが國民

性の長所の一つであらう。

一面にかうした長所を有するが、又他面には大なる短所を有することを忘れてはならない。その最も大なるものとして、私は自由創造の精神に乏しく、従つて模倣追隨を事とし、雷同附和に陥り易い一事を挙げたいと思ふ。歴史を見ても、現状を見ても、私はかく斷言せざるを得ないことを悲しむものである。我が文化は曾て印度に學び、支那に倣ひ、或は歐米を模したもので、何としても民族の自由創造の所産ではなかつた。特殊な國體、敬神崇祖の大道、祝詞和歌俳句、上代に於ける氏族制度、鎌倉時代の武家政治、徳川時代の封建制度等には、全く固有なものもあり、又模倣であるといひ難いものもあるが、大體に於てわが國の文明は、模倣の要素を多く含んでゐるといへる。

明治維新の大業は、神武創業の精神に則つたものと言はれる。

その氣魄の雄渾にして、志操の壯烈なるものはあつたが、新たな光彩を持つた歐洲文化に接し、加ふるに條約改正の大業を控へてゐたので、先づ泰西諸國の模倣を急務として、自由創造の風を振起すべき機會と環境とを與へられなかつたのである。さうして明治時代には、幾多の驚くべき業績があるに拘らず、模倣追隨の國民性の缺陷も、益、その大を加ふるに至つたのである。かゝる情勢に對し、成るべく速かに一轉機を劃さなければならぬと言ふことは、識者の夙に叫んだ處ではあるが、事實は容易に行はるるに至らなかつた。かの條約改正が、國民の多大な犠牲によつて成し遂げられた時こそは、確かに之をなすべき最初の好機であつた。併し既に日露戦争の危機が孕まれてゐた時であつたので、實現する事は無理であつた。日露戦争の終結後は第二の好機であつたが、此の時も遂に空しく機會を逸してしまつた。

○歐洲戰後數年を経て、歐洲文明の行詰りが、批評家の論議に上ることの多くなつた今日こそ、遅れたりと雖も、自由創造の大精神を鼓舞作興すべき機運の彌、動き出した時であると言はねばならぬ。然も我が陛下は、登極の初に、模擬を戒め創造を勗め、と教を垂れさせられてゐる。苟も國民たる者、正に大に力をこゝに致すべきであらう。

されば、自由創造の大精神を喚起するには、如何なる方法を取ればよいか。これは眞に重大な問題である。かくの如き國民性に關する大問題は、一二の特別の方法によつて奇効を奏し得べきものではない。政治と言はず、教育と言はず、經濟と言はず、あらゆる方面に於て、不必要な統一束縛を撤廢し、國民をして附和雷同の陋習を脱せしめ、各、その個性に基づき、自由にその天分を全うせしめ、自己の尊嚴に目覺めさせなければならぬ。而し

て自由な研究、獨創の美風を作興するがために、一切の方法を講じなければならぬ。そして、それと同時に個人主義の放縱に墮して、國家社會を念としないやうになることのないやうに、細心の注意を要する。即ち初にいつた國民的感激性の長所を大いに發揮し、更に我等の尊ぶべき個人は、社會生活、國家生活の基礎の上に立てる個人であり、重んずべき個性は、普遍性の基礎の上に立てる個性であることを明かに知り、我等の人生は、單なる個體を以て最後の存在とせる個在分立の人生にあらず、始なき始より、終なき終まで、永遠に生命を有し、而も一切を包括せる全一の大人生であることを會得し、我等の個體乃至個性は、實にこの全一の大人生の表現で、その全一の基礎を忘れずに、之を充實發展せしむることこそ、全一の進展を見る所以であるといふ理解を十分に於て進まねばならぬ。かくて始めて國家社會を熱

愛しつゝ、自由創造の大精神を發見することが出来るであらう。

(道の國日本の完成)

二 秋のこゝろ外二篇

綱島梁川

綱島梁川
名は榮一郎
倫理學者
岡山縣生
明治四十年歿
年三十五

一 秋のこゝろ

一 美術家語りて云はく、われ曾てひねもす秋を郊外に探りて
秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに結び出でたる赤柿の累々たるを
見て、始めて秋こゝろにありと叫びきと。げにも、秋の姿をさなが
らに具象にして描き出だせるものありとせば、それは碧落の空に
躍如として結び出でたる赤柿を措きてはまたとあらじ。秋は
實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるにあ
らずや。そのむかし、燕村抱一などいふ畫家が寥々たるこの一
物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋

燕村
與謝長庚
俳人・畫家
天明三年歿
年六十七
抱一
酒井忠因 畫家
文政十一年歿
年六十八

漓揮灑し出だせる詩眼流石に凡にはあらざりけり。(梁川全集)

二 垣根の薺花

ことし、秋は初の垣根の薺花、朝な夕の露にすずしきころ、庭
の片隅に打棄てられたる古鉢の、去年の生命の一粒を辛くも宿
したるが、いつの間に萌出でけん、一尺ばかりなる蔓莖の、やうや
う力なげに青空にあこがれそめて、青黄色したる薄葉二つ三つ
着きたり。もとより心にもとどめでありけるが、ある朝ふと起
出で見れば、さばかりわびしかりし蔓莖に、白き大輪の花ただ一
つ、あはれ美しうも、げ高うも咲きつるかな。生命の通路いとく
るしきこの蔓莖にして、天つ日影の恵いと薄きこの病葉にして、
思ひきや、白一點、精采奕々、露に輝き光を含み、靈しき天地の心を
咲きいでなんとは。をりからを垣根に咲盛れる花のいろく、
皆けおされたる心地して、われは此の花一つに心動きぬ。

(梁川全集)

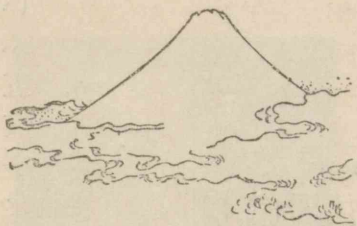
三 谷間の白百合

われは谷間の白百合花なり。謙へりくだりの谷深ければ、虚榮の風に吹かるゝ虞なく、操の匂高ければ誘惑の波に揺らるゝ憂なし。人訪れねども、峰の松風夜な／＼の夢に通ひ、日影さゝねど、岩間の清水思の絃をしらべあふ。富貴の花と誇りて心の眞まことを戕ふことなく、文明の花と昌えて形の皓あまきを失はず。日を趁うて不ふ斷に轉ずる雄心われには燃えねど、外を慕はぬ一念の鏡に、高き碧空の影も親しみ、人を魅するなよび姿のわれにはなけれど、素き心の一すぢぞ歸依信樂の誠なる。あはれわれは大神の恵の充ち足らへる小さき僕しもべの花の白百合なり。白きはただわが装のうへのみかは、身も白く、魂も白く、夢も亦白し。(梁川全集)

三 伊勢物語

一 東下り

昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき國求めんとてゆきけり。もとより



(筆谷桂條下)り下東の平業

友とする人一
人二人して諸
共にゆきけり。
道知れる人も
なくて惑ひゆ
きけり。三河

八橋
愛知縣碧海郡知
立町の東に遺蹟
あり

の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といふことは、水の蛛手に流れ別れて橋八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。

その邊の木の蔭におり居て、乾飯くひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の曰く、かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて旅の心を詠め。といひければ、

から衣きつゝなれにし妻しあれば

はるくきぬる旅をしぞおもふ

と詠めりければ、皆人乾飯の上、に涙落して、ほとびにけり。往きく、て駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らんとする道はいと暗う細きに、蔦かづらは茂りて、物心細く、すすろなる目を見「かゝる道にはいかでかおは



八橋伊勢物語古版の本の挿圖

宇津の山
宇津谷峠といふ
静岡縣安倍郡と
志太郡との界

することと思ふに、修行者逢ひたり。京にその人の許にとてする。といふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとてふみ書きてつく。

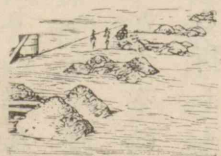
駿河なるうつ山邊のうつゝにも

ゆめにも人の逢はぬなりけり

富士の山を見ればさ月のつごもりに雪いと白う降りり。



たつの細道



尻 鹽

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪のふるらん

鹽尻
鹽田で砂を丸く
積んで塚の様に
したもの
すみ田川
今東京市に屬す

都鳥
水禽類の一種、
體長一尺三寸許
り。嘴と足とが
赤く頭部と背面
は黒く腹部は白
い。海に近い水
邊に住み小魚蟲
類を食ふ

その山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたら
ん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。
なほゆきくゞて、武藏の國と下つ總の國との中に、いと大きな
る川あり。それをすみ田川といふ。その川のほとりに群れる
て思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守
「はや船に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らんとするに、皆
人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白
き鳥の嘴と足とあかき、鶺鴒の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を
くふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひけれ
ば、「これなん都鳥」といふを聞きて、
名にしおはばいざ言とはん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと
と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。
(伊勢物語)

二 惟喬の親王

惟喬親王
文徳天皇第一の
皇子小野宮と稱
す
水無瀬
今の大坂府三島
郡廣瀬村
右馬頭
在原業平
交野の渚の院
大坂府北河内郡
牧野村



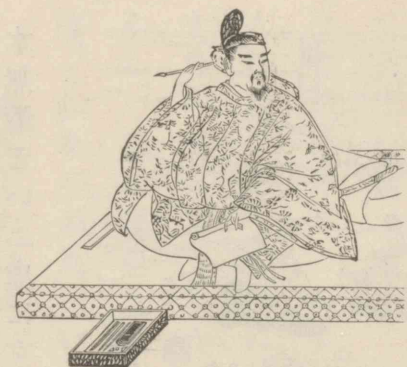
渚の院

昔惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに
水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮に
なんおはしましける。その
時右馬頭なりける人を、常に
ゐておはしましけり。狩は
懇にもせて、大和歌にのみか
かれりけり。今狩する交野
の渚の院の櫻殊におもしろ
し。その木の下におり居て、
枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌詠みけり。馬頭なりけ
る人の詠める、
世の中にたえて櫻のなかりせば

春のこゝろはのどけからまし
となん詠みたりける。又ある人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれ
うき世になにかひさしかるべき

とて、その木の下に立ちて歸るに、日暮
になりぬ。



業平卿

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更く
るまで物語して、さてあるじの皇子入
りて大殿ごもり給ひなんとす。十一
日の月も隠れなんとすれば、かの馬頭
よめる。

飽かなくにまだきも月の隠るゝか

山の端逃げて入れずもあらなん

小野

京都府愛宕郡

比叡の山

京都市の東北に
ある山。山城、
近江兩國にまた
がる。延暦寺が
ある。

母なむ云云

業平の母伊登内
親王。桓武天皇
の御女で阿保親
王の妃
長岡
京都府乙訓郡向
日町

かくしつゝ、まうで仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪おろ
させ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らん
とてまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。強ひて御
室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしま
しければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいで聞えけり。さ
ても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければえ侍ら
はで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見んとは

とてなん泣くゝ來にける。

(伊勢物語)

三 さらぬ別れ

昔男ありけり。身はいやしけれど、母なん親王なりける。そ
の母長岡といふ所にすみ給ひけり。子は京に宮仕へしければ、

まうづとしけれど、しば／＼えまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さるほどに、師走ばかりにとみの事とて御文あり。驚きて見ればこと言はなくて、

老いぬればさらぬ別のありといへば
いよく見まくほしき君かな

となんありける。これを見て馬にも乗りあへず参るとて、いたう打泣きて道すがら思ひける、

世の中にさらぬ別のなくもがな
千代もといのる人の子のため
(伊勢物語)

四 倫敦塔

夏目漱石

倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去

夏目漱石
文學者
名は金之助
東京市生
大正五年歿
年五十

塔橋
Tower
Bridge

と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車汽車の中に取残されたるは倫敦塔である。

此の倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、將、古の人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひ乍ら物靜な日である。空は灰汁桶を搔交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだやうに見ゆるテムスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いて居るかと思はれる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから、不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ所に停つて居るやうである。傳馬

遊就館
東京靖國神社境
内に在る多數の
武器を藏して陳
列する

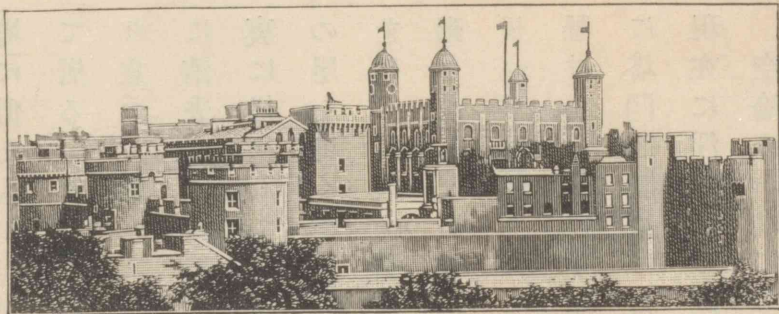
の大きいのが二艘上つて来る。只一人の船頭が艦に立つて艫を漕ぐ。是も殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白き影がちらくする、大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去の感である。さうして其の中に冷然と二十世紀を輕蔑するやうに立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許に立つて居る。其の偉大なるには今更のやうに驚かれた。此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔と云ふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうして其を蟲眼鏡で覗いたら、或は此の



河
ス
ム
マ
ー
子

セピヤ
Sepia

「塔」に似たものが出来上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が、我が心の裏から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を我が腦裏に描出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟の寐足らぬ夢の尾を曳くやうに感ぜられる。暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るか、と怪しまれて來た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現在に浮游する此の小鐵屑を吸収してしまつた。空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向ふに一つの塔があ



倫敦塔

る。是は丸形の石造で石油タンクの状をなして、恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。その中間を連ねて居る建物の下を潜つて向ふへ抜ける。中塔とは此の事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黒鐵の兜が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄すると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁を歩む哨兵の隙を見て、逃出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆる時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せて、犇めき騒ぐ時も、亦塔

上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。或時は無二に鳴らし、或時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて、葛に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として既に百年の響を収めて居る。

（漾虛集）

五 平家雜感

高山樗牛

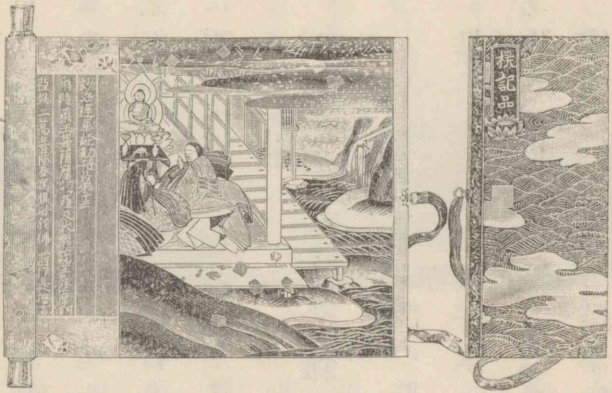
一 一門の盛衰

世にも哀なるは平家とぞいふめる。げに此の一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなかくに及ばざりけり。案ずれば一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず。秋の嵐の吹きすさばんずる朝なほ春の夜の夢臚にして、覺めての後は、行

高山樗牛
名は林次郎
山形縣の人
文學博士
明治三十五年歿
年三十四

一題の遺詠に云云

忠度をさす。平家都落の時忠度京都にひきかへし藤原俊成の門をたいたこと己身の現在に云云
維盛をさす
恩愛に絆され維盛が都に留め置いた妻子に戀戀としてゐたことを指す



二 清盛の逝去

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の

平 されば風雅にかくれては一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛に絆されては己身の現在に來世の果報をおもはず。哀は桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀なりける運命かな。

入道

平清盛をさす

保平
保元の亂と平治の亂

小松内府
内大臣平重盛。小松殿といつた。治承三年七月歿(六元)

六慾
眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の慾

鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より、太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の今の身ぞと觀じたる時、かれ果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身にあまりて、保平のいさをし又言ふに足らずとは思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱ししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚し奉り、はては軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすこと無かりしか。かりにも佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を捨てて未來の淨樂を欣求する一念を發すること無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで其の

平家都落

壽永二年七月

南都の餘燼

治承四年十二月

平重衡が奈良東

大寺・興福寺を

焼いた

墨股の勝鬨

治承五年三月、

重衡等は、源行

家を尾張國墨股

に討つて大に破

つた

み吉野の

三吉野の山のあ

なたに宿もがな

世のうき時のか

くれがにせん

(古今集)

初念を飜すことあらざりき。彼はまさにその生けるが如くに
して死したりき。

三 都 落

凡そ人國の傳へ遺しし史は多かれど、平家の都落ばかり、あは
れにもまた目覺しきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄かに
雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治
淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ一門の
天下身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野の山のあなた
に隱家は無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにも
ならんよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生
死も知らぬ別れ路に、人のあはれの限もなし。また歸り來べき
都としも思はねばにや、六波羅池殿西八條以下、一門譜第の邸宅

宿房、京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬるこ

そあわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々
悲しむ。保元此の方天下の榮華をつくした
る花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、末は煙
の浪路をば行方も知らずさすらふらん。直
衣束帯の身にも今は黒金の衣を着けたれど
も、誰かは詠嘆の餘哀になれて、弓矢の響を勵
むべき。さても捨て難き命や。今こそは憂
世なれ。流石に忍ばるゝ昔の様の夢に入る
をば如何にせん。翠華揺々として西に向か
へば、秋風到る處の野に滿てり。嗚呼、昨日は
東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西

一炬の煙

唐の杜牧の阿房

宮賦に「楚人一

炬可憐焦土」

故郷を

故郷を焼野が原

とかへりみて末

も煙の浪路をぞ

行く 平經盛



平家都落(春日権現靈驗記繪卷)

笛吹く人云云
壽永二年十月平
清經月夜に笛を
弄して海に入る

海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空とやおぼしけん、日暮舷に笛吹く人あり。響は遠く煙波を掠め、三軍齊しく耳を欬つ。嗚呼、此の時此の人、想果して如何。

四 没落

平家はさすがに名門のこととて、没落のきはまで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゑしくもまた哀の極みなりき。木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣請受けけれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐を討つべき由をいひ送りぬ。平家の答はかくなりき。「よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこ

木曾なんど
木曾義仲のこと

なたに渡らせ給ふ。須く兜を脱ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきかと。あゝ、何ぞ其の言辭の堂々として、没落のやからに類はざるや。平家にして若し一時の權變を弄びて勢を回らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乗ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて成敗の數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、垢を含みて存へんよりも如何ばかり美はしかるべき。

本三位の中將一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん」とぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて誅せられけるもの、其の數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天

子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そもく、我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍にあひて暫く西國に行幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし。還幸なからんに於ては神器などか都に還るべき。そもく、賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて妄に干戈を弄ぶ。聽て神罰其の身にかへるべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界高麗、天竺、震旦のはてまでもまかりなん。悲しいかな、人皇八十一代が間傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申すと。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲に其の名節を

枉ぐることをなさざりき。あはれ平家の世盛は誠に大いなりしが、其の没落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな平家、かくして亡びたりとて何の恨むるところぞ。

(樗牛全集)

六 忘れ難き日

姉 崎 嘲 風

姉崎嘲風
名は正治
京都市の人
宗教學者 文學
博士
東京帝國大學教
授
友
高山樗牛

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へば早五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消失せぬ。「健在なれ」「再び早く相見ん」との別の言葉はなほ耳に響き、最後の握手なほ掌に感ぜられつゝも、見わたせば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼か

清見瀉
静岡縣興津町附
近の海岸



袖師の松原

くて相別れたる我が友今何處にかある。彼はその夜西の方足柄を過ぎて清見瀉のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑り無限の感に沈ましむ。

三月、君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍とし

三月
明治三十三年
函嶺
箱根山

有渡の山
静岡縣安倍郡久
能山の別稱
袖師の松原
興津と江尻との
間の松原
埋骨の地
静岡縣清水市龍
華寺



龍華寺境内

て夢のごとし。中宵欄に憑りてしづかに君をおもひ、うた
た人世遭逢のはかなきを歎きぬ。

人世遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に

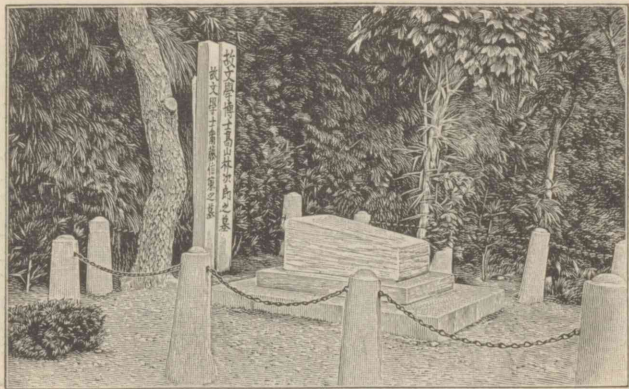
残し、ひとり我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り

來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊

の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜五年前の今日の別離を偲んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらず。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みをふかからしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜

またこゝにあり、彼が遺文餘薰新にして我が思慕日毎に彼に通



高 山 博 士 の 墓 墳

ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜なり。形は見えねど彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入りきたる。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。

歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては、生死路相隔てず。三世一心のうちに融來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の邊に風靜なれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。

(停雲集)

七 擬古小品四章

村 田 春 海

村田春海
國學者
江戸生
文化八年歿
年六十六

水路新雪
泊舟とまのしづく
のおとたえてよは
のしぐれぞ雪にな
り行
春海

一 月に對して

いよす高うかゝげて、ふけゆく影をひとりうちまもりて、つら
つら思ひみれば、自ら心の塵も名残なくて、なべてよろづのこと
ぐさこそ、くまなく思ひ出でらるれ。さるは千種の花に露のに
ほひをそへ、絲竹の音の響をすますらんたぐひの、艶にまめい

水路

泊舟とまのしづく

新雪

うしろたへし
雪まがりゆき海

たる世の常のをかしさをば、さらにも言はじ。いでやすみ上る
光の高く現れて、人の目とどめんに、眩きばかりなるも、時の間に
あやなき霧のまよひにかきけたれて、ただ闇かとはかりたどり、
中空に暫しありと見ゆるも、やがて西になることの止め難きや、
浮雲のさだめなくて、昨日は榮え、けふは衰ふる世の有様こそ、ま

づおぼゆれ。

又浅茅が露にやどれども、所せくもおぼえず、海原の波に浮か
びても、廣きを知られざるは、たかきみじかき、おのがじしの住か
のきは、くにつけて、身のやすかる心しらひによそへつべきも
あはれなり。

又おちたぎつ瀬々の白玉は、これがために心清さを増せど、野
澤の水のにごりに宿りても、さらにみしぶの汚しさをきらはざ
るは、世にたがひ、時に忤ふ事なくて、光を韜み跡をかくすとかい
ふらんさかし人の心のおくさへ汲みしられぬべし。 (琴後集)

二 きぬたを聞く

清水濱 臣

近しと聞けば遠し。遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、た
ゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらん、砧の
音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そも

清水濱臣
國學者
江戸生
文政七年歿
年四十九

中島廣足
國學者
熊本藩士
元治元年歿
年七十三

此の音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。
(泊酒舎集)

三 岸頭待舟 中島廣足

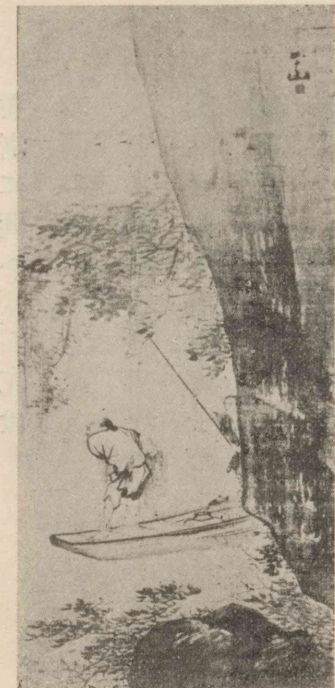
いとよき折かなとて急ぎ來るに、岸さし放ちたるこそ、いみじう口惜しけれ。「なほしばし、いま一人のせてよ」といふく走りくるもあるを、聞かぬ顔して漕ぎ行くうしろでは、いとくきものから、さのみ漕ぎかへしたらんには、え堪ふまじくやと覺ゆるを、あなにくのふな人や、徒に人を走らせて」と、腹あしげにいひたるこそ、心なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間とほくさしわけゆくを、彼方の岸にも待遠なるけしきに、たずみたる人あり。水上よりさしおろす筏のさまの、いと靜なるに、中洲のわたりには、ちひさき舟つなぎて、四手とかいふ網さしおろして、とかくするなどいとをかしく、一日もかくて見まほ

故郷の鱸
吳人張翰の故事

直なる針
太公望の故事

しう覺ゆ。おくれたる人々、つきく來あひて、たちまつ程、やうやう漕ぎもてきたるこそ、うれしけれ。
(樞園文集)

四 漁夫辭 清水濱 臣



漁夫辭

秋吹く風に耳を欹てて、故郷の鱸の繪を思ひ出でけん人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゝみて、直なる針に王公の位を釣りえし翁は、うらやましくもあらざや。我はただ世を捨て舟に棹して、山陰のしづけく水草の清からんあたり、息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき樂みとはなしぬべきぞかし。
(泊酒舎集)

薄田泣菫

名は淳介

詩人

隨筆家

大阪毎日新聞記

者

岡山縣の人

八 石彫獅子の賦

薄田泣菫

一

番者に問へば、石工は
 木蔭の夢に耽りぬと。
 入りて小暗き仕事場に、
 刻みさしたる唐獅子の
 圓き項を手に撫でて、
 誰ぞ吟ずるは靜やかに。
 朽木の棚に据ゑられて、
 顔くすぼれしあら彫の
 豕狗兒野の狐。

さては雄鹿のむらがり、
 こは秀でたる驕かな、
 日浴びて立てる獅子の像。
 裂けたる岩に爪かけて、
 雄々し、憤るかその姿。
 鬣長く背にまきて、
 見れば湧寄る春の潮。
 胸は豊かに力男が
 曳きしぼりたる弓の如。
 忿怒現ずる明王の
 廣き肩より燃上る

焰か、長き尾は躍り、
綿毛密なる足の裏
落ちし野薔薇の花踏むも、
巢くへる鳥は目覺めんや。

(石工いみじき心得よ。)

瞳子彫られぬ唐獅子は、
光を知らぬ盲目の身、
鼻かんばしき香を嗅ぐも、
未だ前脚ふみあげて、
花園小路亂さじよ。
鑿の手またく捨てられて、

御苑の夏の曙や、
緑したゝる木の蔭に、
巨人の如く立たん時、
雄姿いかに。背に伏して
暫し想像に耽らせよ。

二

汝の王者かたどられ、
眞白き石に刻まれぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸列なりて
蹄の前にひざまづき、
弱きを恥ぢて僕たれ。

偉なる靈魂くだり來て、
眞白き石に包まれぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸列なりて
その輝を身に浴びて
卑き心を抛てよ。
大なる權威顯れて、
眞白き石に具せられぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸列なりて
王に捧ぐる燔祭ほんさいの
聖き火盞ひざんを整へよ。

斑の牛と羚羊は
深き痛手に甘んじて、
進みて燃ゆる火に焼けよ。
誇るべきかな、犠牲の
高き譽は汝に在り。
羨む群ぞ愚なる。
見よ犠牲はそなはりぬ。
獅子は額に鬣の
長き流を顛はせて、
あな起ちあがる。「戦闘たたかひと
勝と力の權化なり。
伏せよ」と呼べば皆伏しぬ。

盛なるかな、その令や。
自然は死せり永久に。
人は魔のごと強からず。
われは王者ぞ。萬有の
値ちの源ぞ。煩と
悶の胸の主人なり。

あゝ、運命の眩きをも
眼開いて眺め入り、
胸わなゝかぬ雄心の
若き勇氣に溢れたる、
勝利かちの思に漲れる

この身、この世に、何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なりと、
聲は喇叭の音に似たり。
時に黙もだ止は破られて、
高き讚美と服従は、
雷のとよみに現れぬ。

三

今想像の羽たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
豊かにも又靜なる
姿何等の誇ぞや。

石彫永く傳りて、
榮とならんは幾千歳。
あゝ、藝術は支配せよ、
とはの生命ぞ汝に歸する。

九 薩摩守

三人 僧 茶屋 船頭

茶屋「罷出でたる者は、邊の茶屋でござる。往き來る人に、今日も茶を賣らうと存ずる。扱もく、今日はさびしい事かな。人通もござらぬよ。僧「罷出でたるは、關東邊の愚僧でござる。さ

天王寺
四天王寺
聖德太子御建立

やうにござれば、諸國修行を致し、又これよりも、大阪天王寺へ參らうと存ずる。まづそろ／＼參らう。茶屋「なう、申し御坊、お茶參らぬか。僧「これは扱、知らぬ人の茶をくれうといやる。立ち寄つて飲べうと存ずる。扱も道を歩けば、彼のやうなる慈悲深い人もござるほどに、はあ、唯今はお茶飲めとおつしやる。一つたませう。茶屋「はあ、なんぼなりとも參りませう。僧「扱も扱も、これは好い茶でござるの。茶屋「いや、身どもが手茶でござりまする。僧「も一つたませう。茶屋「はあ、參りませう。僧「これは熱うござる。茶屋「畏つてござる。うめて進ませませう。僧「あゝ、扱、喉渴きにござつたに、ちやうどようござる。も此う參る。茶屋「ござりまするか。僧「忝うこそござれ。此う參る。茶屋「申し御坊、何も忘れはなされませぬか。僧「されば、數珠もおりやり、笠もある。いえ何も忘れは致さぬ。茶屋「なう御坊、茶代を忘れさ

神崎の渡
攝津神崎川の渡

つしやれた。僧「ふん、その茶には代がいりますか。茶屋「はれ扱、茶屋の茶に、錢ぜにのいらぬと云ふ事がおぢやるか。一服一錢でおりやるわいの。僧「はれ、したらば飲むまいものをば。なう、茶屋殿、錢は持合せませぬほどに、この數珠を置いて參る。茶屋「して、ほんん、にござらぬか。僧「なか、おりやらぬ。茶屋「して又こなたは、どれへ向けてござる。僧「いや、かう天王寺へ參ります。茶屋「まちつと行かしゃれば、神崎の渡とて船がござるが、それは何と遊ばつしやるぞ。僧「いや、それは渡つて參る。茶屋「渡るやうな川ではござらぬ。僧「いや、その儀ならば、船賃ふねぢんは持たず、神佛は見透し、これから下向致そ。茶屋「なう、見ますれば餘り痛はしい義でござる。船賃の進ぜう。僧「これは扱、茶の錢進ぜぬ上に、船賃までは忝うこそござれ。さらばこれへ下されい。茶屋「なう御坊、いや某船賃の進ぜうと申するは、別の事ではござ

秀句
口合のことにて
謎洒落などを云
ふ

ただのり
忠度に只乗をか
く

乗手
乗客
道者
修行者巡禮など
のこと

らぬ。彼の渡守は、秀句好きでござるによつて、こなたにたゞ乗せる秀句を、教へて進ぜうと云ふ事でござる。僧「はれ扱、忝うこそござれ。して、それは何と申しませうぞ。茶屋「あれへござつたらば、まづ船に乗らつしやれう、その時に、船賃と云はう時に、平家の公達薩摩の守ただのりぢやとおつしやれい。僧「はあ、出來ました。ただ乗るによつてただのり。はあ忝うこそござれ。此う參ります。茶屋「下向道には寄らつしやれい。僧「はあ、さればこそよ、茶屋の云ふ如く大きな渡がある。渡守が居ぬか、何處許に居るぞ。船頭「罷出でたるは、この所の渡守でござる。今日は日ひ並なみもようござるほどに、定めて乗手もござらう。そろそろ參る。僧「いや、あれへ渡守と見えて居ります。呼びませうぞ。ほうい。船頭「何ぢややい。僧「船に乗らうやい。船頭「この所は大事の渡ぢやによつて、一人や二人は乗せぬいやい。僧「道

先達
案内者

者は數多^{おほ}多いわい。船頭「幾人程あるぞ。僧百人も居りやるわいの。船頭「いやそんならば乗せう御坊。して其の百人の道者は。僧「いや、皆は後から来る。某は先達ぢやによつて、先へ行かねばならぬ。渡してたもれ。船頭「何をおつしやるぞいの。一人や二人を渡す所ではおぢやらぬいの。僧「なう船頭、百人の船賃の渡さうほどに、乗せてたもれ。船頭「いやそんなら渡しませう。さあ〜乗らつしやれい。なう〜こなたは、今の様な乗りやうがあるものでおぢやるか。船がいかう不案内と見えておりやるよ。僧「なう船頭、この船には、底に穴やなんどはないか。船頭「はあ、彼の坊の云はしますことわい。穴があつてもよいものでありやるか。して御坊は、どれからどれへござるぞ。僧「いや、關東から天王寺へ參る者でありやる。船頭「お若うござるが、近頃殊勝にござる。して御坊、云ひたい事がござるぞ。僧「何でかござ

得を取るより名
を取れ
當時の諺である
利益よりも名譽
を尊べとのこと

るぞ。船頭「いや、船賃の貰ひませう。僧「いや、向ふへ著いてから進ぜう。船頭「なう御坊、元もさう云うて、乗逃げが數多^{おほ}多うおぢやつた。今はそれぢやによつて、川中で取ります。それにおくしやらぬ人は、向ひな島へうち上げて置きます。僧「あゝ、こはい事をおしやる。船賃の、したら渡そ。船頭「受取りませう。僧「平家の公達。船頭「いや、小言を云はずとも、渡しやれいの。僧「いや、秀句で渡そ。船頭「いや、何とおしやるぞ。某が秀句を好く事が、關東まで聞えておぢやるか。僧「なか〜、神崎の渡守、秀句好きぢやといふことは、關東に知らぬ者はおぢやらぬ。船頭「扱も扱も、それはまことでおぢやるか。眞實か。わは、扱も〜、得を取るより名を取れぢや。秀句で受取りませう。して何と。僧「平家の公達薩摩の守。面白おぢやるか。船頭「あゝ面白ござるは。して後は。僧「向ふで渡そ。船頭「なか〜、向ふで受取りま

せうぞ。後が面白ござろの。僧「面白いこととござる。船頭「はて
 扱、こなたのやうなる御坊とも存ぜず、乗せうの乗せまいのと申
 した。又下向道には二日も三日も留めまして、船遊をさしませ
 うぞ。僧「忝うこそござれ。船頭「身拵をさつしやれい。頓て船
 は著きまするぞ。僧「心得てござる。船頭「さあ、上らつしやれい。
 して今のは。僧「平家の公達薩摩の守、薩摩の守、かみておりや
 る。船頭「いや、その後が聞きたうおりやる。僧「はつて、茶屋が何
 とやら云うたが、船頭「なう坊、秀句に茶屋はいるまい。後わいの、
 何とめさるぞ。いや、後が聞きたうござる。僧「後は平家の公達
 薩摩の守はあ、今、思ひ付けた。船頭「何と。僧「物と。船頭「何と。僧「青
 海苔の引干。船頭「何でもないこと。とつとと行かします。〔狂言記

一〇 光頼卿の参内

青海苔の引干
 忠度の名を青海
 苔と間違へたの
 である

十九日
 平治元年十二月

光頼卿
 藤原頼頼の子
 承安四年薨
 年五十

公卿僉議
 公卿の會議
 信頼

藤原忠隆の第三
 子。元治元年源
 義朝等と兵をあ
 げて敗れて斬ら
 れた。年二十七
 (八十九)

紫宸殿(シシイ)
 南殿(ナデン)と
 もいふ。正殿。
 殿上

殿上の間のこと
 清涼殿の南面に
 ある

さる程に、内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。
 勸修寺左衛門督光頼卿、此の程は信頼卿の振舞過分なりとて、不
 参におはしましけるが、参内して承らんとて、殊に鮮やかに束帶
 引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに帯び給ひ、乳母子桂右馬
 允範能に膚に腹巻着せ、雑色の装束に出立たせ、自然の事もあら
 ば人手にかくな。汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。とて、
 御身近く置き、其の外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張
 つて、所々門々を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追は
 せて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめ
 て通し奉る。紫宸殿の後ろを経て殿上を廻りて見給へば、信頼
 卿一座して、其の座の上、葛達皆下にぞ着かれたる。光頼卿は
 不思議の事かな。人は如何に振舞ふとも、彼は右衛門督我は左
 衛門督なれば、下には着くまじきものと思はれければ、左大辨

長方卿
藤原顯長の子
時に年二十
後二位中納言に
なる。建久三年
歿。年五十三。
公三
母方の舅「ヲヂ」
顯「光賴」
信「惟方」
「女(忠隆)信賴」
衛府督
近衛・兵衛・衛門
の役所を總稱し
て衛府といふ
こゝでは右衛門
督信賴をさす

宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へ」と色代して、閑々と歩み、信賴卿の上にもむずと着き給ふ。光賴卿は信賴卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば殊に恐れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になつて色を失はれければ、着座の公卿あな淺ましと見給ふに、光賴卿下襲の裾引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承つて參内する所なり。抑、何事の御諛ぞ」と問ひけれども、信賴卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、況して兪議の沙汰もなし。程經て光賴卿つい立つて、「惡しう參つて候ひけり」とて、閑々と歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵共之を見奉りて、あはれ、此の殿は大剛

賴光
源滿仲の子
賴信
賴光の弟

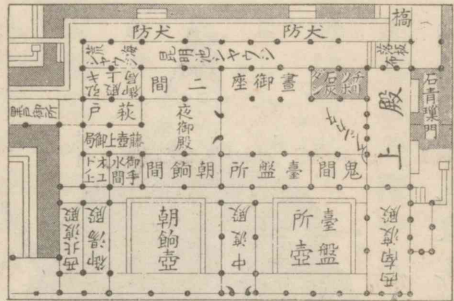


東 帶 の 圖

の人かな。去る十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、些かも臆したる體も見え給はず。あはれ、此の人を大將として合戦せば、如何ばかりか頼もしからんと申せば、傍なる者昔賴光・賴信とて源氏の名將おはしましき。其の賴光を打返して光賴と名告り給へば、是も剛にましますぞかし」といへば、又傍より、など其の賴信を打返して信賴と付き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病におはします。

といへば、壁に耳、天に口といふ事あり。怖し、怖し、聞かじ。といひながら皆忍び笑に笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず。殿上の小菴の前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましたしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人共なり。其の中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實驗の爲に、神樂岡へ向かはれける事は



清涼殿

小菴トコ 清涼殿の上の戸の方。石灰壇の南壁の上にある小さい窓。見參の板 鳴板ともいつてふみならして參入退出などを知らせる。荒海の障子 清涼殿の廣廂に立てた布障子。別當惟方 檢非違使別當藤原惟方。萩の戸 清涼殿の夜の御殿の北にあたる部屋。少納言入道 藤原通憲入道信西

神樂岡 京都市左京區にある

勸修寺内大臣 藤原高藤 三條右大臣 藤原定方 高藤の子 「英雄」 英雄の家の略。公卿の資格の名 大貳清盛 平清盛のこと。當時大宰大貳であつた 切目ベキ 和歌山縣日高郡

如何に。以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將、檢非違使、別當は他に異なる重職なり。其の職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實驗は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて赤面せられけり。

光頼卿重ねて、こは如何に、勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代臣、又十一代、承り行ふ事は皆是徳政なり、一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至る迄、人にさしもどかるゝ程の事は無かりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿よ

主上
二條天皇
 黒戸御所
 清涼殿の北方に
 ある殿舎
 上皇
後白河上皇
 一本御書所
 内裏殿舎の名
 内侍所
 神鏡を申す
 温明殿
 紫宸殿の東方に
 ある
 夜のおとど
天皇寢御の御室

り馳上るなるが、和泉紀伊國伊賀伊勢の家人等待受けて大勢にてあなり。信賴卿が語らふ所の兵若干ならじ、平家の大勢押寄せて攻めんには時刻をや回らすべき。又火などを懸けなば、君も争てか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。如何に況んや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡此の時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はずとこそ聞ゆれ。相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黒戸御所に」「上皇は」「一本御書所に」「内侍所は」「温明殿に」「劍璽は何處に」「夜の御殿に」と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當斯くぞ答へられける。また朝餉の方に人音のし、楯形の穴に人影のしつるは何者ぞ、と宣へば、それには右衛門督住み給へば、其の方様の女房などぞかけろひ候らんと

朝餉
朝餉の間の略
 朝夕の御食事を
 開召すところ
 楯形の穴
 殿上の間の北側
 にある小さい窓

許由
支那の古代の人
 堯が位を彼に讓
 らうとした時、
 耳の汚れとして
 これを洗つた

申されければ、光賴卿聞きもあへず、世の中は今ほ斯くござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には、信賴住み、君をば黒戸御所に遷しまるらせたり。末代なれどもさすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は、王法を如何守り給ひぬるぞ。異國には斯やうの例ありと雖も、我が朝には未だ此の如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな、とて、のろ／＼しげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげに立たれたれども、且は悲しくて、我如何なる宿業によつて、斯かる世に生れ合ひ憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ、とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。

(平治物語)

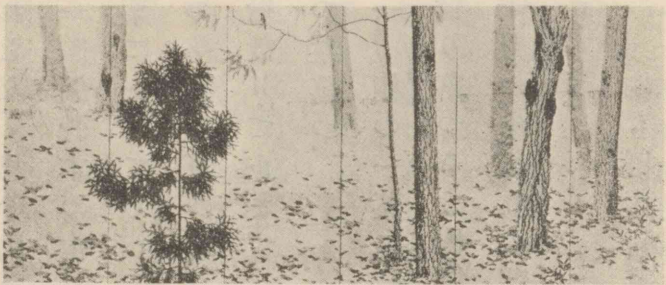
永井荷風
名は壯吉
小説家
東京の人

一一 草 箒

永井荷風

一 白日門を閉ぢて、獨り閑庭に飛花落葉を掃ふ時の心ほど我ながらなつかしきはなし。詩歌よく憂を忘れしむと云へども、筆硯また世渡る便たつきとなり果てては、市氣俗念先立ちて、身の淺間しさいよ／＼切なく、却て悔のみおほからしむ。さても我取立てていふべき程の憤も悲もあらぬに、いつとはなく世と人とにそむき果て、今は何事も見ず、何事も聞かざらん事を願へり。かくては無聊極りなく、わづかに隣家の飛花わが家の落葉を掃いて、茫然として歲月を送るのみ。

一 飛花は春に限らず、落葉また獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時、冬漸く寒く、八つ手の花、雪ならぬ雪を降らせば、梔子くもなしの實落霜紅うめもどきと共にいよ／＼赤し。梅・櫻・桃李のながめ、昨日と過



(筆草春田菱) 葉

落

ぎ、垣には卯の花の雪つもりて、藤棚のかげに紫の房もやう／＼落ちつくせば、雀の子既に巢立ちしてあたりは夏なり。五月、松の花は閑庭の苔に金沙を撒き、七月、石榴の花は散りて綠蔭に緋の毛氈をのぶ。

落葉は新樹の綠潮の如く湧出づる時より、庭のすみ／＼垣のきはに掃き盡くせぬばかりうづたかし。これ去年一冬の霜を忍びし椎・檜・楨・扇骨かほね木の如き常磐木の古葉、若芽の伸ぶるに従ひ風をも待たで落散るなり。春盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、一重の小袖俄かに薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落葉、窓の障子にはら／＼と音づる

れば、心は忽ち時雨の夕に異ならず。思はずとももの事ども何くれとなく思ひ出ださる。

一 扇骨木の古葉は落ちんとする時、秋の楓の如く紅となり、青葉に交りてちらほら花の如く目立ちて見ゆるも風情あり。竹の落葉に夏の暑さは漸く烈しく、檜椎の古葉は土用に入りても猶散りて止まず。兎角する中早くも秋立ちて、芭蕉の葉破れ桐の葉落つ。

一 桐の一葉に秋を知るとは誰も云ふ事なれど、桐よりも早く散り落つるは梅櫻の葉なるべし。桐の中にも、碧梧の如きは十月の半ば、其の葉黄ばみて、猶枝上にとゞまれるを見る事珍しからず。

一 柳も梧葉、荷葉、芭蕉と共に秋には脆きものの中に數へられたれど、初冬十一月山茶花も早や咲出でんとするに、御堀の柳を

見れば青き葉猶落盡さざることあり。

一 年中の景物およそ首夏の新樹と晩秋の青葉といづれをか選ぶべき。この時節兩つ乍ら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて友禪の如く、一は黄葉に映じて錦繡の如し。然れども新緑は花にも似て束の間の眺なり。その軟かき緑は長からず、梅雨晴の日の光漸く強くなり行くに従ひて、緑は黒ずみて遂に盛夏の塵を浴ぶ。やがていつともなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風打騒ぐ梢のいただきより、木の葉は其の緑薄く黄ばみ出して、次第に日蔭の小枝にも及ぶ程に、初に色變へし木の葉まづひらくと閃き落つ。われ何とは知らねど譯無きに、日毎夜毎の物思ひ朝な夕なの憂さ辛さ身につもる此ごろ、唯木の葉の果敢なく色かはり行くさま打眺むれば、花にも若葉にもいや増していひ知らぬ心地するなり。

一 去年の秋より冬にかけて、われ人なき庭に唯一人落葉掃きつゝ、木々の梢の色かはり行くさま仔細に打眺め、つれづれのあまり手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて若葉、青葉の緑、木により濃淡強弱さまざまに湧き出づるを、若し西洋の音楽に譬へて、緑の管絃樂とも名付け得たらんには、憔悴の詩情云ひがたき黄葉の管絃樂は、まづ十月より其の序曲をば奏て出づるなり。

一 梅櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つる事多けれど、それは數へざるべし。後の彼岸に、残暑も今は全く去りぬる夕、碧梧桐、槐、皂莢の葉はいつしか打黄ばみたり。わが庭に一樹の木蘭あり。木蘭は、人その花をのみ愛づれども、黄葉またなか／＼に捨てがたし。檜の高き梢に百舌啼叫ぶ十月となるや、大きき柏の如き木蘭の葉は淡くほのかに黄ばみ出づ。其の色曇りし日の

夕まぐれ、夜將に來らんとする折には、白く影の如くに浮立つさま果敢なくも又あはれなり。さても十一月となり、冬いよ／＼迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。

一 萩も、われ花のみならず枯れ行く葉をも愛づ。十一月半ばより、萩の葉は黄ばむと共に散りかけて、十一月に至れば一葉をも留めず。凋落まことに早し。これに比ぶれば、秋草の中にて葉鶏頭の十一月半ば、菊花盛の頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭琵琶に泣く老婦の心にもたとへつべし。

一 藤棚に藤の葉の浅く黄ばみしも趣あり。臘梅の黄葉は、黄昏の微光を得て、哀れいと深く、皂莢の細き葉は落花に異ならず。榎の落葉は、そぞろに驛路の鈴ひびく街道の夕を思はしむ。これ皆十一月の光景にして、此の月、柿の葉紅に染まり、鳶の葉また

赤し。

一 楓葉は菊花とならびて可憐の秋をなすこと云はずもあれ。公孫樹の黄葉また初冬十一月の美しきながめをつくる。こゝに石榴の黄葉、看來れば其の美敢へて公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細きが、晚風に誘はれて紛々として雨の如く散り落つるや、滿地皆黄色となる。短き日の暮果てて常磐木の木蔭逸早く暗くなり行くに、石榴の葉散り敷く處のみ長く暮れやらねば、月の光照添へるかと思はる。この葉池の水に散り積りて朽ちたる藻を蔽ふ時は、いづれが水いづれが岸とも見えわかず。敗荷、殘柳と相俟つて蕭條たる池邊の廢趣いよゝゝ深し。

一 楓葉は搖落の殿をなすものなり。菊花凋み盡くして臘梅の蕾點々數へ來らんとする時、常磐木のかげに木枯をよけては、

極月猶楓葉の枝にあるを見る事あり。されど冬至に及びて、あらゆる樹木いよゝゝ葉なきに至れば、菊は早く其の切株に新緑の芽を生じ、水仙の葉亦三四寸ものびて春風を待てり。園居年年景物相同じ。然れども看來つて興常に新なれば、草木のよく人を幸ならしむる事、蓋し黄金にも優れりと謂ふべきか。

〔荷風全集〕

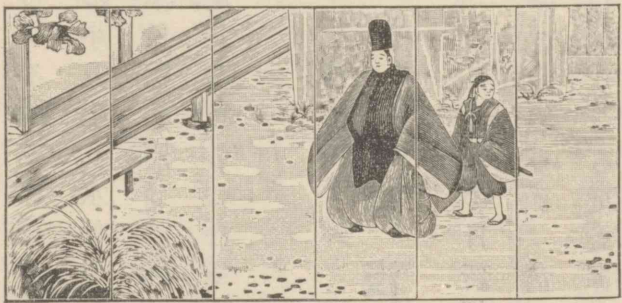
一二 淺茅が原

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやうゝ半ばになりゆけば、福原の新都にましくける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の

六月九日
治承四年
新都
福原 攝津國
源氏の大將
源氏物語の主人
公
明石「シカ」
神戸市の西方明
石市

繪島が磯
淡路島の北端
白浦・吹上・和歌の浦
紀伊國
住吉・難波
攝津國
高砂・尾上
播磨國
伏見
山城國
廣澤
大和國
實定卿
藤原氏公能の子
穎敏で才學があり正二位左大臣に至り建久二年薨(八五)世に後徳大寺左大臣といつた

近江河原
鴨川の西岸で近衛通の東



舊都の月 (乾南陽筆)

浦傳ひ、淡路の迫門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦・吹上・和歌の浦、住吉・難波・高砂・尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人々は、伏見・廣澤の月を見る。中にも徳大寺の左大臣實定卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆變り、はてて、稀にのこる家は、門前草深くして庭上露茂し。蓬が柚・淺茅が原、鳥のふしどと荒れはてて、蟲の聲々うらみつゝ、黄菊・紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましゝける。大將その御所へ参り、まづ隨身を以て、惣門を叩かせらるれば、内より女房の聲にて、誰そ

大宮
皇太后藤原多子
右大臣公能の女

や。蓬生の露打ちはらふ人もなき所に」と答むれば、これは福原より大將殿の御のぼり候」と申す。「さ侍らば、惣門は鑰のさゝれて候ぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將さらばとて、東の小門よりぞ参られける。

大宮は、御つれづれに、昔をや思しめし出でさせ給ひけん。南面の御格子あけさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將つと参られれば、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、夢かや現か。これへこれへ」とぞ仰せける。昔今の物語どもし給ひて後、さ夜もやうやう更けゆけば、舊き都の荒れゆくを、今様にこそうたはれけれ。

舊きみやこを來て見れば、淺茅が原とぞあれにける。月のひかりはくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ。

と押返し、押返し、三返謠ひすまされたりければ、大宮を初め奉りて、御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける。さる程に夜もや

うやう明けゆけば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。

(平家物語)

森鷗外

名は林太郎

文學博士 醫學

博士

大正十一年歿

年六十三

一三 うた日記抄

森

鷗

外

一 ねぎごと

おほならば	とまれかくまれ、
雲間もる	かたわれ月の、
かすかなる	光にも似て、
つゝましく	かつくゝにほふ
歌をよく	聞かんとやする。
よしさらば	汝に告げてん、
ひと時に	ひと歌を見よ、
わすれても	ふたつな見そね。

卯の花の

ふゝめる頃の

ほとゝぎす、

忍音ながら

一聲に、

全またき心を

われは籠めてき。

二 ほりのうち

空かきくもり	晝のまの、
寒さなごめる	ゆふ闇に、
南のまどを	うつ雨と、
ともにおとなふ	聲すなり。
誰か來たると	見さすれば、
腕射られし	兵卒の、

道に迷ひて
門邊にこそは

たもとほり、
來ぬるなれ。

創を裏みて

わが床に、

ならび臥さしめ

問ひけらく、

「第一線の

ほりぬちの、

まことのさまを

語らずや。

帽にあしたの

霜ふりて、

夕のあめに

袖ひぢつ、

糧を運ばん

道をなみ、

糲^こ嚙^みみて

日をや經し。

いかにといへば

兵卒は、

頭たゆげに

うちふりて、

「辭まばなめしと

おほさめど、

思へば胸ぞ

痛むなる。

かしこのさまは

歸らん日、

妻に子どもに

母^{はは}父^{ちち}に、

われは語らじ

今ゆのち、

心ひとつに

祕^{ひそ}めおきて。

三 唇の血

土囊

十重に二十重に

つみかさね、

屋の上を

おほふ土さへ

厚^あければ、

わが送る

榴霰^{りゅうげん}彈^{だま}の

甲斐^{あゐ}もなく、

敵はなほ

散兵濠を

棄てざりき。

剩へ

囊の隙の

射眼より、

打出す

小銃にまじる

機關砲。

一卒進めば

一卒僵れ、

隊伍進めば 隊伍僵る。

隊長も

流石ためらふ

折しもあれ、

一騎あり

宵金山上より

驅歩し來る。

命令は

突撃とこそ

聞えけれ。

師團旅團に傳へ、

旅團聯隊に傳ふ。

隊長は

士氣今いかにと

うかゞひぬ。

時はこれ

五月二十五日

午後の天、

常ならば

耳熱すべき

徒歩兵の、

顔色は

蒼然として

目かゞやき、

咬みしむる

下唇に

血にじめり。

戰略何の用ぞ、

戰術はた何の用ぞ。

勝敗の

機はただ存す

此の刹那に。

健氣なり

屍こえゆく

つはものよ、

御旗をば

南山の上に

立てにけり。

誰かいふ

萬骨枯れて

功成ると、

將帥の

目にも涙は

あるものを。

侯伯は

よしや富貴に

老いんとも、

南山の

唇の血を

忘れめや。

眞山青果
劇作家
仙臺の人

一四 乃木將軍

眞山青果

時——明治三十七年十一月盡日頃。

處——金州半島柳樹房第三軍司令部中庭。

乃木將軍の次男保典、旅團副官の服装にて快瀾らしく入来る。戰場生活に顔も日に焼け、急に大人びて見える。保典は初めつかつかと父將軍の陣舎に行かんとせしが、白井中佐を見て戻り来る。

保典（舉手して）白井中佐殿。

白井 お、保典さんですか。（目を開き一種の感慨をもつてその姿を見て）立派な旅團副官ですね。何か報告ですか。

保典 いえ、旅團司令部員補充のために、第二十八聯隊まで特使を命ぜられました。その歸途こちらに立寄るやうに、旅團長の許可を得て來ました。（青年らしき微笑をもつて快

瀾にいふ）

白井 先程は電話があつたが、今朝ほどは大損害でしたね。

保典 そりや甚ひどかつたですよ。（次第に私交上の親密さを見せて、遂



乃木大將二三〇高地を見る

には卓子に腹這の姿となり中佐の煙草入など弄りつゝ話す。僕は初めて實際に、砲彈の威力なるものを経験しました。砲彈は音響とか振動とかそんなもんぢやありません。何と云ふかなあ……迫力とでも云ひますかね。皮膚全體に感じますよ。朝飯を終つて、僕は書記と共に穴藏にゐて執務にかゝらうとする時、ぱり／＼と空氣を擽いて、老鐵山



保典と白井中佐の談話

からの巨弾が落下爆發するのを感じたと思ひます。突
然、周圍が眞暗になつた。あつと氣が付いて見ると、塹壕
も何も、一面平地になつて何も無
いんです。頭の上から眞つ黒な
塵埃が煙のやうに降つて來ます。
何といふ甚い塵埃だ——僕思は
ず叫ぶと、あゝ、豪い芥だ——と云
ふ者がある。書記が電話機をも
つて叫んでゐます。暫くして、砲
弾だと氣が付くと同時に、旅團長
閣下は何うだらう、やられたに相
違ない。——夢中になつて芥を搔分け、(その手付など示し
つと) 司令部の方へ轉び込むと、どしん！ 何かに突當つ

た。乃木か、何うした——旅團長の聲です。閣下も御無
事ですか——お前遣られたと思つた——閣下も遣られ
たと思つた——何だ、その顔？——ひよいと旅團長の顔
を見ると、旅團長こそ淺草で賣つてゐる泥人形、眞つ黒で
す。自分の顔は知らずに、何んだその顔——はゝはゝ、
僕は實に腹を縫つちやつた。何だといふ自分の顔こそ
眞つ黒泥人形……はゝはゝ、唯ね、それでも……はゝ
はゝは、(涙を拭ひつと)有難いと思ひましたよ。僕だつ
て、少しは顔色が變つてゐたに相違ない。然し、眞つ黒で
せう、泥人形でせう。蒼くなつたところを、旅團長に見ら
れずに濟みました。何だその顔——、今思ひ出しても……
はゝはゝ、

保典、又思ひ出して笑ふ。白井中佐も一緒に笑ひながら、ふん

ふんと話を聞きゐたりしが、話の中途より何か考へ出し、熟考の體なりしが、急に態度を改めて保典に問ふ。

白井　そして司令部へは……。急に、お父さんに會ひたくなつて來たんですか。(やゝ冷やかなる笑を浮べる)

保典　(話の腰を折られ訝しさに) 何うしてですか？

白井　あなたはあなただけの御奉公、閣下は閣下だけの御奉公、例へ御親子でも公と私との關係は、明かにして置かれるがよいと思ふ。

保典　旅團長に願つて、許可を得て訪問したんです。

白井　例へ旅團長の許可があつても、でも、常に公私の區別だけは判然として置きたいものです。

保典　(白井の態度を訝りつゝ、且青年らしくむつとして) 何時、何時、わたしが、公私の區別を混同しましたか。

白井　混同なすつたとは云はない。混同なさるなといふのです。

保典　白井さん、何かあるならばつきり云つて頂きます。

白井　あなたは御自分を、乃木第三軍司令官の子息と考へる前に、一少尉乃木保典を忘れてはなりません。御注意までに申すのです。

保典　何時僕……それを忘れました。云つて下さい。

白井　あなたはあなたに與へられた責任内に於て、一少尉としての軍務を忠實に遂行され、ばそれで十分である。あなたは、心私かに第三軍司令官として父閣下の策戰の責任、戰爭の結果より來る責任——そんな事を考へて、心を痛められる時はありませんか。父閣下の責任又は不名譽を、その身に負うて償ひたいなどと考へるやうな時は

ありませんか。(語調を厳しく)それが餘計なことと云ふ
ものです。例へその人の子であると云つて、一少尉たる
身分をもつて、全軍の責任を感じるなど云ふことは、有る
まじきことです。寧ろ僭越です。

保典 (中佐の眞意をやゝ解すると共に、急に聲を頼はし) 馬具、馬具
父は私が副官になつても、まだ馬具を送つてくれません。
(俯向く)

白井 馬具——? 將軍はまだ馬具を送つて上げませんか。

保典 今使用してゐるのは、旅團長からの借用品です。馬具の
用意なくては、旅團副官の任務がつとまりません。

白井 然うですか。とうに送られたものと思つてゐた。早速
お送りするやうに申しませう。(疑と保典を見詰める)
保典 (顔を上げ) いや、私が直接父に要求——。

白井 そりやいけません。

保典 何故いけませんか。

白井 あなたには誤解がありさうだ。いけません。

保典 何の誤解ですか。

白井 將軍が今日まで、必要な馬具を送られなかつたのは、思
ふに多忙に取紛れてゐられたのでせう。それをあなた
の若い血氣の心から、父が馬具を送らないのは、いつまで
も自分を安全地帯の副官の地位に置く氣ではない。今
に必ず馬具の必要のない戦線へ、自分を送り出す心に相
違ないなど——そんな風に考へられるのを誤解と云
うたのです。馬具は私から、直ちにお送りするやうに關
下へお話しませう。

保典 私から云ひますよ。わざく、今日それで來たんです。

白井 いけません。今日は閣下にもお會ひなさらんが宜しか
らうと思ふ。

保典 何うしてですか、白井さん。假に僕が、貴方の云ふやうに
父の意を誤解したとして、それでも好いでせう。腰拔役
に副官をしてゐるよりは、戦線に立つて戦友と共に、勇し
く戦死したいのは——一少尉乃木保典としての希望で
す、熱望です。父に面會します。(立ちて行きかゝる)

白井 そりやいけませんよ。(わざと落着きはらつて) そんな我
儘の考の起るのは、あなたは乃木希典大將の子息たるこ
とを忘れないからだ。

保典 我儘——？ (むつとして戻り来る) 僕我儘ですか。

白井 我儘でせう。外の少尉ならば、例へ希望しても熱望して
も遂げ得られないことを、あなたは軍司令官を父とする

から願ひ出られるのだ、

保典 白井さん。あなたはそんな——、(顔を見詰む)

白井 あなたが願ひ出で、父大將閣下がそれを許されるとすれ
ば、そりや吾が子を愛するためだらう。一尉官の身をも
つて、直接軍司令官の前に希望を述べに出る——そんな
事は、既に分を超えるといふものだ。それを父だから願
ふ、子であるから許す、それでは明かに、公私の別を紊るも
のであると、白井には考へられますね。

保典 然し、兄は南山で、立派に戦死してゐる——。

白井 それが何んです。(飽く迄も動ぜず) 兄さんには鐵砲があ
たつたから倒れたんだ。あんたにはまだ中らないから、
然うして生きてゐるんだ。鐵砲のあたるあたらないは
……こりや偶然だ。(流石に聲を顫はす)

保典 僕はこの毎日の戦況を見るたびに……早く死にたい！

白井 下らんことを仰しやる。それが既に、一少尉の言葉ぢやない。

保典 然し、然し、同期の友人がどんく、仆れて行くのを見ると、

僕は、僕は……生きてゐるのが苦しい！

白井 そりやあんたの、小さな見得と弱さといふものだ。

保典 (叫ぶやうに云ふ) 父の、父の苦勞も……察します。

白井 そりや寧ろ、婦女子の情愛だ。若しこの戦争について將軍に責任ありとすれば、それは吾が子二人の命をもつて償はれる問題ぢやない。將軍閣下自身、軀を殺したところで償はれる問題ぢやない。世界の歴史、世界の軍事史をもつて批判さるべき大問題であらうと思ふ。義太夫の太閤記十段目のやうな親孝行は取りません。

保典 (ぼうとして顔を上げ) それぢや、何うすれば好いのです。

白井 自然に逆らつてはいけませんまい。仆るべき時には仆れる、死ぬ時は死ぬ。自然と國家の命令のまゝに動く、自己の小感情をもつて、大きな理法を動かして弄つてはなりません。要するに、あなたは乃木希典の子たることを忘れなけりやいかんと思ふ。將軍も又、乃木少尉なる者を吾が子なりと考へてはいかんでせう。少尉も、大將も、一個獨立の存在です。少尉は少尉としての任務をつくり、大將は大將としての軍務に服するが肝要第一でせう。保典 それぢや僕、今日は父に會はずに歸隊する方が好いのですか。

白井 なるべくは、閣下のお心を……搔亂したくはありません。一昨夜でしたか、わたしは或報告をもつて將軍の寢室を

訪ふと、閣下はむつくり起きて、わしの顔を見詰めて、「あ、君か——」と仰しやります。「何うかなさいましたか」と問ふと、閣下は少し羞らふやうな面持で、「わしは今子供が、副官肩章をかけずに来たから、叱つて歸した夢を見てゐた——」聲を落して、將軍はこの頃、よく色々の夢を見られるやうです。

保典 (急に) 歸りませう、僕……、隊へ歸ります。

白井 然うなさるか。馬具は必ず後からお送りませう。

(參謀部室の窓をガラリと開き、津野田少佐顔を出す。)

津野田 白井中佐、こりや何うしても駄目だ。わしの手には行かん。(と電報を出しつゝ、保典を見て) お、何時來られました。旅團は苦戦でせう。が、もう一つ、もう一つ踏ん張らなくちやいかん。

保典 御安心下さい。全軍必死です。(歸り支度をなす。)

津野田 (何の氣もつかず) あ、あんたの處に小包が來てゐます。序に、持つて歸られたら何うですか。

保典 又來ませう。今日は……任務もありますから……。

津野田 東京からですよ。お母様からの御馳走らしい。(氣輕に、戸口の方へ顯れ) 從卒がゐるでせう。取つて來て上げませう。(去る。)

保典 (幾分の羞恥を含みて) 父はよく夢を見る人です。子供の時から好く……不思議な夢の話を聞きました。兄が戰死した時も、廣島の宿屋で……奇妙な夢を見てゐたさうです。(話頭を轉じて笑ふ) われは夢など見る隙はないが、それだけ衰へてゐるのですかね。

(白井中佐、無言、地上を見詰むるのみ)

保典 酒は何うでせう。やはり……常の通ですか。

白井 お變りはありません。三合づつ、缺かされません。

保典 (咳くやうに) ちよつと、會つても行きたいがなあ……。

白井 ……………。

(津野田少佐、菓子折を持來りて保典に渡す。)

津野田 風月堂らしいね。(笑ひながら) 旨いですよ。お母様が御

自身買ひに行かれたのでせう。

保典 (菓子折を受取りつゝ、何となく物足らぬ風情にて) そして、何と

か云ひませんでしたらうか……父は。

津野田 (又、電報を出して見ながら) いや、別に——。

保典 私が來てゐることを……父は知つてゐるのでせう。

津野田 (頸を括つて考へつゝ) そりや、御存知ですとも。

保典 (白井中佐に氣がねしつゝ) 實は、兄貴の遺物なんですが……。

何時までも僕の手に置くより、何とかしたいと思ふんです。

津野田 地圖を出して、たゞ二百三高地を睨めてゐられました。

毎日、それがこの頃の御課業です。(遠く離れて、電報文を考へてゐる)

保典 困るなあ……。 (誰に云ふともなく) 兄さんの戦死後、三度も父に會つてゐるが、一度も兄さんの話の出たことがない。遺物を何うしていいのか、處置に迷つてゐる。白井さん、何うしませう。

白井 (徐ろに云ふ) 閣下に會つて聞かれても、大抵御返事は、あなたにも分つてゐられる筈と思ふ。

保典 (少し怨しげに、口早くいふ) 分つてゐるから、苦しいんですよ。それ處ぢやない。僕にも分つてゐない外の返事を

——、聞きたいんです。(言葉詰る)

白井 分つてゐない返事とは……？ 保典さん。

保典 僕あ……武人としての父も見たいが……人間としての親父も……時には見たいんです。

白井 勝典君の戦死に就いて何も云はれないのは、寧ろ云ふに忍びざる感情があられるのでせう。

保典 父はそんなに……子供の戦死を口に出しかねる程弱い人でせうか。

白井 その意味ぢやない。戦争の結果をかんがみて、わが家族のことなど、口に出される場合ぢやないと思はれるかも知れません。

保典 そんなに迄、父は自ら責めてゐるんですか。

白井 保典さん。そりや私……云ひたくない。

保典 親父の心の殻は厚過ぎる。あの心の殻を、鎧を破つてやりたいもんだなあ……。 (ホロリとして俯向きつゝ、小包の封が開けてゐるのに心付く) あ、誰だ。小包を開けたのは、津野田さん、これは誰が開けたのですか。

津野田 (顔を上げて) 些つとも気がつかなくつたねえ。

保典 (青年らしくむつとして) いけませんね。こんな事しては、中に何が入つてゐるか、知れないぢやありませんか。

津野田 その儘になつて、押入の棚に乗つてゐましたよ。

保典 不都合だ。人の小包を開封するなんて不都合だ。家からは好く、小包に手紙が入つてゐるんだ。(カサコツと包の中を探し、母よりの書状を出し、封緘に事なきやを好く検めたる上) 不都合ですよ。誰にしたつて、父にしたつて、無断に封を切るのは不都合だ。母親から來る手紙なんて、多少

は、誰だつて、涙もろい文句があるもんです。

(保典ぶつ／＼呟きながら小包を整理する時、乃木將軍煙草をくゆらしつゝ、思案顔に通るかゝる。)

將軍 何をぶつ／＼云つとる。早く歸らんと、遅くなるぞ。

保典 は？ (凝と父の顔を見る。)

將軍 (顔を見ず行過ぎつゝ) 其の旅團では、兵士の給與は十分であるか、靴は行渡つてゐるか、跣足の兵卒は見かけないか。

保典 不足と申せば、彈丸の供給に缺乏を憂へてゐます。

將軍 鐵砲玉で戦ふんぢやない。血で戦ふんだ。

保典 (後姿を追ひつゝ) お父様！

將軍 (振向かず、歩む) 書面は讀んだ。然し師團長にも承諾してあるのだ。今が今、原隊に復歸ともいひ出せまい。そのうちに、時機があるぢやらう。

保典 でも初から、當分のうちといふ御約束でせう。

將軍 これからが長い。幾度も戦線に出られるよ。

保典 (白井を見て) それに就いては、何も云はん積りてゐます。

將軍 父は父子は子、一人づゝの御奉公だ。お前も國家の人である。わしの自由にするといふのは間違つてゐる。(歩み去らんとする。)

保典 お父様！ この菓子折は誰が開けたんです。

將軍 わしが開けたよ。四つ五つ減つてる筈だぞ。

保典 いけません。そんな事しては……いけません！

將軍 (子息の聲を訝りつゝ) 何故いかんか。怠屈の時、ぼつ／＼取つて食つた。いかんか。

保典 いけません。そんな……いけません——。

將軍 (初めて吾が子を見ながら) ほう、何うしていかんか。

保典 僕この菓子……、要りません。 いけません——。

將軍 何を云ふか。 留守から、お前に送つて來たのだ。(俯向き

ゐる保典を不審さうに見て笑ふ) わしへ送つて來たのは、餅

に炒豆ぢや。 お前の方はハイカラで、品物も上等だ。 ぢ

やから、食つたよ。

保典 品物ぢやありません。 封を切つたのが、いけないんです。

將軍 (莞爾やかに微笑) 菓子ぢやもの、開けたつて……。

保典 いけません、要りません！

將軍 ひどく叱られるなあ、は、は、は。 ぢや、禮狀だけはお前

から、東京へ出して置いてくれ。 菓子はおれが貰はう。

保典 僕、歸隊いたします。

將軍 然うか。 師團長へもよろしく傳へてくれ。

保典 (白井津野田に敬禮したる後、將軍の前に來り、ポケットより紙包

の寫眞を出し) 兄上が戰死の時、御葬式の際の棺の寫眞が
出來て、同隊の戰友から昨日送つて來ました。 一組を差
上げます。

將軍 然うか。(受取り、中も見ずにポケットに納める)

保典 もう一組ありますが、これは保典が、お預りして置きます。

東京へは、送らない方がよろしいと考へます。(父の目を

屹と見詰める)

將軍 うん、それで好からう。

保典 東京へは送りません。 送らない方がよいと思ひます。

將軍 うん、然うぢやらう……。(聲色共に動かず)

保典敬禮して門外の方へ歸り去る。 その少し前より白井中佐
と津野田少佐は電報を間に置き、小聲に話し合ふ。 將軍直ちに
その方に歩み寄る。

將軍 津野田君。さつきからうろくしてゐるが、何ぢや。

津野田 電報ですが、何う苦しんでも皆目讀めません。

將軍 はあん、誰からぢや。

津野田 大本營發、山縣參謀總長閣下からの電報です。

將軍 山縣？ 何か急用ぢやらう。讀んでみて下さい。

津野田 それがいけません。まるで意味が通じません。精神い

たる處とか、旅順の城とかいふのは分りますが、あとが駄目です。

將軍 凡そ字數は、何のくらゐ有りますか。

津野田 然うです、ね、文字は九十……五六もありませうか。

將軍 ふん。そりや詩であらう。眞直に、その儘讀んで下さい。

(ポケットより手帳と鉛筆を出して書く)

津野田 ヒ、ヤ、ク、ダ、ン、ゲ、キ、ラ、イ、テ、ン、モ、

マ、タ、オ、ド、ロ、キ、ガ、フ、キ——

將軍 ちよつと待つて、…漢詩で

す。百彈激雷、天もまた驚

き——然うです、詩です。

それから。

津野田 ガ、フ、キ、ハ、ン、サ、

イ、バ、ン、シ、ヨ、コ、

タ、ハ、ル、セ——

將軍 (手を舉げ)ちよつと待つて。

ガ、フ、キ、——うん、合圍

か。合圍半歲萬屍横たは

る。——それで、

津野田 こゝは續けて讀めます。精神到る處、テ、ツ、ヨ、リ、



山縣參謀總長の電文を讀む

モ、カ、タ、シ、イ、ツ、キ——

將軍 精神到る處鐵よりも固し。合圍半歳萬屍横たはる精神
到る處鐵よりも固し。ふん、それで、

津野田 イ、ツ、キ、ヨ、タ、ダ、チ、ニ、ホ、フ、ル、リ、

ヨ、ジ、ユ、ン、ノ、シ、ロ、ユ、メ、ニ——

將軍 一舉直ちに屠る。旅順の城一舉直ちに……、それで、

津野田 ユ、メ、ニ、リ、ヨ、ジ、ユ、ン、ヲ、オ、ト、シ、

イ、レ、サ、ク、ア、リ、ノ、ギ、シ、ヤ、ウ、ダ、

ン、ノ、イ、ツ、サ、ン、ニ、キ、ヨ、ウ、ス、ガ、

ン、セ、ツ。

將軍 夢に旅順を陥れ、作あり。乃木將軍の一祭に供す、含雪。

白井 山縣參謀總長は、旅順陥落の夢を見られたのですか。

將軍 然うらしく思はれる。(其の邊を歩みつゝ、低聲に微吟す)百

彈激雷天もまた驚く、合圍半歳萬屍横たはる……

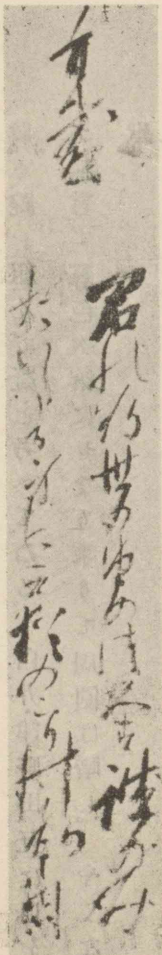
津野田 參謀總長も氣が氣ぢやあられまい。國民も皆夢に見て

ゐるだらう。焦れつたいことだなあ!

將軍 (不圖立止つて、靜かに云ふ) 津野田少佐もう一度。

津野田 は?

有感
君の爲世のた
めつくす誠の
みおいたる身
にも猶のこり
けり
有朋



山縣有朋筆

將軍 一舉直ちに屠る旅順の城ですな。屠るですか。

津野田 (電報用紙を見て) はい。ホ、フ、ル、とあります。

將軍 然うですか。山縣は夢に託して、乃木の胸元へ、匕首を突

付けてゐる。(その椅子に腰掛けて、凝と一點を見る)

白井 え、匕首?

津野田 ヒ首とは何んです、閣下。

將軍 一舉直ちに屠る旅順の城ぢやない。一舉直ちに屠れ旅順の城と、山縣はわしに讀ませるころと思ふ。百彈激雷天もまた驚く。合圍半歳萬屍横たはる。精神到る處鐵よりも固し。一舉直ちに屠れだ！

將軍、腕を組んで凝^{じつ}と考へてゐる。白井津野田、互に目を見合せて無言。暮色次第にせまり來りて周圍は暗し。やゝながき沈黙。

將軍 津野田少佐。御苦勞だが頼まれて頂きたい。

津野田 は。

將軍 詩人の禮儀としては、長者よりの贈詩をうくる時は、その韻字に和して應答の詩を送るのが常となつてゐる。然し、結構なくして詩は作れん。乞ふ、三日間の猶豫を與へ

よと、總長宛に返電して下さい。

津野田 畏まりました。(門脇の電信隊の方へ走り去る。)

將軍 白井中佐。(屹然として立つ。)

白井 はい。

將軍 二百三高地最後の強攻撃を開始します。伊知地參謀長以下、全參謀部員を召集して下さい。

白井 只今、即刻でございますか。

將軍 (號令する如く) 戦機まさに熟せり。男子闘ふべきの時來る。全員直ちに集合すべし。

白井 はい！

白井中佐走り去る。巨彈一發、遠からぬ地點に爆發す。乃木將軍、石の如く立つて動かず。

一五 能は歌よみ

名簿
名刺

たがひて
居合せないて

花園左大臣家に、始めて参りたりける侍の、名簿なづかのはしがきに、「能は歌よみ」と書きたりけり。大臣、秋の初に南殿に出でて、機織の鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子げごしに人参れ」と仰せられけるに、藏人五位たがひて、人も候はぬ」と申して、この侍参りたるに、「たださらば汝おろせ」と仰せられければ、参りたるに、「汝は歌よみな」とありければ、かしこまりて御格子おろし、さて候ふに、「このはたおりをば聞くや。一首仕うまつれ」と仰せられければ、「青柳の」と初の句を申し出したるを、候ひける女房達をりにあはずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「物を聞きはてずしてわらふやうやある」とおほせられ、「とくつかうまつれ」とありければ、

春がすみ
古今集春部にあ
る

青柳のみどりのいとをくりおきて

夏へて秋ははたおりぞなく

とよみたりければ、大臣感じ給ひて、萩折りたる御直垂、推出してたまはせり。寛平歌合には、つ雁を、友則、

春がすみかすみていにしかりがねは

今ぞなくなる秋霧のうへに

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人聲々に笑ひけり。さて次の句に、霞みていにしといひけるにこそ、音もせずなりにけれ。同じ事にや。

後鳥羽院の御時、定家卿殿上人にておはしける時、いかなることにか、勅勘によりて籠り居られたりけるが、あからさまと思ひけるに、その年も空しく暮れにければ、父俊成卿その事をなげき

職事
藏人

て、かくよみつゝ職事につけたりけり。

あしたづの雲井にまよふ年くれて

霞をさへやへだてはつべき

職事、この歌を奏聞せられければ、御感ありて、定長朝臣に仰せてぞ、御返事ありける。

あしたづは雲井をさして歸るなり

けふ大空のはるゝけしきに

やがて、殿上の出仕ゆるされにけり。

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられてよみけるを、定頼の中納言戯れに、小式部内侍に「丹後へ遣はしける人は参りにたりや」といひ入れて、局の前を過ぎられけるを、小式部内侍御簾より半ば出で

て、直衣の袖をひかへて、

大江山いく野のみちのとほければ

まだふみも見ず天のはしだて

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに」とばかりいひて、かへしにも及ばず、袖をひき放ちて逃げられにけり。小式部、これより歌よみの世におぼえいできにけり。〔古今著聞集〕

一六 古今集の歌

紀貫之
醍醐天皇の頃の
歌人

春立ちける日よめる

紀 貫 之

袖ひぢてむすびし水の氷れるを

春立つけふの風やとくらん

凡 河 内 躬 恒

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける

凡河内躬恒
醍醐天皇の頃の
歌人

紀友則
有友の子
歌人

人によみておくりける
我宿の花見がてらにくる人は
ちりなん後ぞ戀しかるべき

紀友則

櫻の花の散るをよめる
久方のひかりのどけき春の日に

しづ心なく花のちるらん

讀人しらず

題しらず

我が宿の池の藤なみさきにけり

山郭公いつか來なかん

僧正遍昭

蓮の露を見てよめる

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

何かは露を玉とあざむく

藤原敏行

秋立つ日よめる

藤原敏行
富士麿の子
歌人

僧正遍昭
良岑安世の子
歌人

秋來ぬと眼にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

文屋康秀

草も木も色變れどもわたつみの

波の花にぞ秋なかりける

大江千里

大江千里
晋人の子
歌人

是貞のみこの家の歌合によめる

月みればちぎに物こそ悲しけれ
我が身ひとつの秋にはあらねど

在原業平

在原業平
阿保親王の第五
子
歌人

屏風にたつた河にもみぢの流れたるかたをか

けりけるを題に

千はやぶる神代もきかず龍田川

からくれなるに水くゝるとは

坂上是則
延喜の頃の歌人

春道列樹

文章博士
生歿年月日不詳
あすか川
飛鳥川、奈良縣
高市磯城兩郡を
流るゝ川

大和國にまかりける時に雪の降りけるを

見てよめる 坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里にふれるしら雪

年の果によめる 春道列樹

昨日といひ今日と暮してあすか川

流れて早き月日なりけり

題しらず 讀人しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

一七 藝能雜話

一 箕裘の業

或人いはく、本より其の道々の家に生れぬるはさる事なり。さなき類も、ほどくにつけて、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者、藝おろそかにして、氏をつがぬ類あり。道にあらざる類、能によりて、道にいたる徳もあれば、氏をつがんがため、道に至らんがために、彼も是も共に勵むべし。何となく居交りたる折は、そのけじめ見えざれども、藝能につけて召出だされた、だうちある我どちの遊にも、かたへにぬけ出でて何事をもしたらんは、雲泥の心地して人目いみじく覺えぬべし。

すべてみめよく品高けれども、あやしく賤しきが能あるに立ちならぶ折は、その品そのみめも、必ず思ひ消たるゝものなり。譬へば花のあたりの常磐木は、うち見るにたとへなくさめたれども、春の日數くれ峯のあらし過ぎたる後に、緑ばかり残りて、假の匂とゞまらざるが如し。されば、桃李は一旦の榮華なり、松樹

は千年の貞木なり。といへり。世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ、道々の才藝も又父祖には及び難き習なれば、藍よりも青からん事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業をつがざらん、口惜しかりぬべし。

(十訓抄)

二 苗代水

能因入道伊豫守實綱に伴なひて、彼の國にくだりけるに、夏の初、日久しくてりて民の歎あさからざりけるに、神は和歌にめて給ふものなり、こゝろみに詠みて、三島に奉るべき由を、國司しきりにすゝめければ、

天の川苗代水にせきくませ

あまくだりますかみならば神

と讀みて、みてぐらに書きて、社司して申し上げさせたりければ、

能因入道

俗名永愷

橘忠貞の子

歌人

伊豫守實綱

日野三位資成の子

三島

三島の宮 愛媛

縣越智郡

天の川

金葉集に出てる

みてぐら
御手座の意。幣のこと

貞觀の帝云云

唐の太宗、蝗蟲が百性を害するをいたみ、蝗數四を吞み災を己の身に移したといふ故事貞觀政要に出てる

都をば

後拾遺集に出てる

みちのく

陸奥。今の東北地方

博雅三位

兵部卿克明親王の子

管絃に長ず

炎旱の天俄かに曇りわたりて、大きな雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりにけり。忽ちに天災をやはらぐる事、唐の貞觀のみかどの蝗を吞めりし政にも劣らざりけり。

能因は至れるすきものなり。

みやこをば霞と共に立ちしかど

あきかぜぞ吹く白河の關

とよめりけるを、都にありながら、此の歌を出ださん、無念と思ひて、人にも知られず、久しく籠りゐて、色を黒く日にあぶりなして後、陸奥の方へ修業の序に讀みたりとぞ披露しける。(十訓抄)

三 鬼の笛

博雅三位、月のあかりける夜、直衣にて朱雀門の前に遊びて、終夜笛を吹かれけるに、同じ様に直衣着たる人の笛吹きければ、誰人ならんと思ふ程に、其の笛の音、此の世にたぐひなくめでた

く聞えければ、怪しくて近よりて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。我も物いはず、かれもいふ事なし。かくのごとく、月の夜毎に行きあひて、吹く事夜比になりぬ。彼の人の笛の音、ことにめでたかりければ、試にかれをとりかへて吹きけるに、世になきほどの笛なり。其の後なほく、月の比になれば、行きあひて吹きけれど、本の笛を歸し取らんと、いはざりければ、ながくかへてやみにけり。三位失せて後、帝この笛を召して時の笛吹どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。其の後、じやうざう淨藏といふめでたき笛吹ありけり。召して吹かせ給ふに、彼の三位に劣らざりければ、帝御感ありて、此の笛の主、朱雀門の邊あたにて得たりけるとこそきけ。淨藏彼の所に行きて、ふけと仰せられければ、月の夜仰の如くにかしこに行きて、この笛を吹きけるに、彼の門の樓上に、高く大きな聲にて、「なほ逸物かな」とほめけ

淨藏
三善清行の子
僧侶
音楽文學に通ず



(浄藏 堀小)

世

常

北原白秋
名は隆吉
詩人

るを、かくと奏しければ、はじめて鬼の笛としろしめしけり。

(十訓抄)

一八 建國の歌

北原白秋

一

そのかみ、天地闢けし初
げに萌えあがる葦芽なして、
立たしし神こそ、
國之常立。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

かの若々し神の業を。

二

惟ふに日靈の大御神の、
げに言よさし給へる御詔、

三つの寶
三種の神器のこと

知らせよ皇孫、

三つの寶と。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

豊葦原の中つ國を。

三

神武の御代こそ荒ぶる和し、

げに現神宮太敷きて、

初めて築かせし、

國の礎。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

神ながら崇き道を。

四

爾にぞ明治の大き帝、

げに晴れわたる青高空と、

更にし照らさす、

四方に八隅に。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

わが彌榮の日の出る國を。

五

依り合ふ天地極み知らず、

げに天皇の御稜威盡きず、

誇れよ國民、

われら榮あり。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

ただひとむきの日本魂を。

一九 鉢 木

シテ 佐野常世 前ワキ 旅 僧 ツレ 近 臣
ツレ 同 妻 後ワキ 最明寺入道 狂言 從 者

信濃なる

信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の見やほとがめぬ

(伊勢物語)

大井山

長野縣信濃國北佐久郡大井庄にある山

友の里

長野縣北佐久郡伴野庄

離坂

同郡香掛と輕井澤との間にある

ワキ 行方定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。詞是は一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、先づ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

道行信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけり。

ワキ 急ぎ候程に、上野の國佐野のわたりに着きて候。あら笑

うすひ川

碓氷峠から出て上野の烏川に入る

板鼻

群馬縣上野國高崎市の西八軒

佐野

高崎市の東南二軒

雪は鵝毛に似て

雪似鵝毛、飛散亂人被鵝毳、立徘徊(白樂天)

陸奥のけふ

陸奥國狭布の里

止や、又雪の降來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。いかに、此の家の内へ案内申し候。ツレ 誰にてわたり候ぞ。ワキ 是は修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ 安き御事にて候へ共、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候まじ。ワキ さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。ツレ それはともかくもにて候。わらはは外面へ出てむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。ツレ あ、降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鵝毳を著て立つて徘徊すと云へり。されば今降る雪も、もと見し雪にかはらねども、我は鵝毳を著て立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖狭き細布衣、陸奥のけふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひ寄らずや、此の大雪に何とて是にたゞみ見て御入り候ぞ。ツレ さん候、修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候

程に、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候程に是まで参りて候。シテさてその修業者はいづくにわたり候ぞ。ツレあれに御入り候。ワキ我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。シテやすき御事にて候へども、餘りに見苦しき候程に、御宿は叶ひ候まじ。ワキいや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御かし候へ。シテ泊め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる態にて候程に、なかく御宿は思ひも寄らぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日も暮れぬ先に、一足もはやく御出て候へ。ワキさては、しかと御貸しあるまじいにて候か。シテ御痛はしくは存じ候へども、御宿は参らせ難う候。ワキあら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレあさましや、我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。

シテさやうに思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御いで候まじ。某追付き留め申し候べし。のう、旅人、御宿参らせうのう。餘りの大雪に申すことも聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一つ所にたゞずみて、袖なる雪を打掃ひ、打掃ひし給ふ氣色、古歌の心に似たらずや。駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮。かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。地、是は東路の佐野のわたり。雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。歌げに是も旅の宿、假そめながら値遇の縁。一樹の蔭

駒とめて
新古今集の歌
作者藤原定家
三輪が崎
苦しきも降り來
る雨か三輪が崎
さのわたりに
家もあらなくに
(萬葉集)
三輪が崎は大和
國三輪山の麓だ
といふ

盧生が見し
盧生といへる貧
少年邯鄲の市中
に眠りて、一生
榮辱五十年の夢
を見、覺むれば
主人が黄梁を炊
ぐ間に過ぎざり
きといふ話、枕
中記に見える

のやどりも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒
舊りて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。
シテ、いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、参
らせうずる物もなく候はいかに。ッレ、折節これに粟の飯の候
程に、苦しからずば参らせられ候へ。シテ、さらば其の由申し候
べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にても参
らせうずる物も無く候。折節これに粟の飯のある由申し候。
苦しからずばきこしめされ候へ。ワキ、それこそ日本一の事で
候。賜はり候へ。シテ、のうきこし召されうずると仰せ候。急
いで参らせられ候へ。ッレ、心得申し候。シテ、總じて此の粟と申
す物は、古世いにしへにありし時は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承りて
候に、今は此の粟を以て身命を継ぎ候。げにや盧生が見し榮花
の夢は五十年。其の邯鄲の假枕、一炊の夢の覺めしも、粟飯炊ぐ

程ぞかし。あはれや、げに我もうちも寝て、夢にも昔を見るなら
ば慰む事もあるべきに、のう御覽ぜよ、斯程迄、地住みうかれた
る故郷の、松風寒き夜もすがら寝られねば夢も見ず。何思出の
あるべき。

シテ、夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に
焚いてあて参らせ候べき。や、思出したる事の候。鉢の木を持
ちて候。是を切り、火に焚いてあて申し候べし。ワキ、げに、
鉢の木の候よ。シテ、さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、
數多木を集め持ちて候ひしを、かやうの態に罷りなり、いや、
木好きも無用と存じ、皆人に参らせて候。さりながら、今も梅櫻、
松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて候へ
ども、今夜のおもてなしに、之を火に焚きあて申さうずるにて候。
ワキ、いや、是は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう

埋木の
埋木の花さく事
もなかりしにみ
のなる果てぞあ
はれなりける
(源頼政)

雪山の薪
釋迦の修行した
山

窓の梅の
窓梅北面雪封寒
(和漢朗詠集)

見じといふ
山里の折りかけ
垣の梅の花いか
なる人の見じと
いふらん
(菅家後集)

候へども、自然またお事世に出て給はん時の御慰にて候間、なか
なか思ひもよらず候。シテ、いや、とても此の身は埋木の花咲く
世に逢はん事、今此の身にてはあひがたし。ツレ、唯いたづらな
る鉢の木を御身の爲に焚くならば、シテ、是ぞ誠に難行の法の
薪と思召せ。ツレ、しかも此の程雪降りて、シテ、仙人に仕へし、
雪山の薪。ツレ、斯くこそあらめ。シテ、我も身を地捨て人の
爲の鉢の木、切るとても、よしや惜しからじと、雪打ちはらひて見
れば、面白や、如何にせん。先づ冬木より咲初むる窓の梅の北面
は雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべ
き。見じといふ人こそうけれ、山里の折りかけ垣の梅をだに情
なしと惜みしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見
れば春ごとに、花すこし遅ければ、此の木やわぶると心を盡くし
そだてしに、今は我のみわびて住む、家櫻切りくべて緋櫻になす

御垣守
み垣守衛士の焚
く火の夜はもえ
てひるはきえつ
つ物をこそ思へ
(詞花集)

ぞ悲しき。シテ、さて松はしもげに、地、枝を矯め葉をすかして、
かゝりあれと植ゑおきし、其のかひ今は嵐吹く松はもとより煙
にて、薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚
く火は御爲なり。よくよりてあたり給へや。
ワキ、近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。シテ、御出により
我等も火にあたりて候。ワキ、いかに申し候。主の御名字をば
何と申し候ぞ、承りたく候。シテ、いや、某は名字も無き者にて候。
ワキ、何と仰せ候とも、ただ人とは見え給はず候。自然の時の爲に
て候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。シテ、此の上
は何をかつ、み候べき。是こそ佐野の源左衛門の尉常世がな
れる果にて候。ワキ、夫は何とてかやうの散々の體にはなり給
ひて候ぞ。シテ、其の事にて候。一族どもに押領せられて、かや
うの身となりて候。ワキ、のう、それは、何とて鎌倉へ御上り候ひ

最明寺殿
北條時頼

て、其の御沙汰は候はぬぞ。 シテ運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。 かやうに落魄おちぶれては候へども、御覽候へ是に、武具一領、長刀一えだ、又あれに馬を一匹繋いで持ちて候。 是は、只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此の具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ、着到につき、さて合戦始らば、 地敵大勢ありとて、一番にわつて入り、思ふ敵とよりあひ討合ひて死なん。此の身の、此の儘ならば、いたづらに飢につかれて死なな命。 なんぼう無念の事さふぞ。

ただ頼め
ただ頼めしめじ
が原のさしも草
われ世の中にあ
らんかぎりは。
新古今集。清水
観世音の御歌

ワキよしや、身のかくては果てじ。 只頼め、我世の中にあらん程、又こそ参り候はめ。 暇申して出づるなり。 ツレ名残惜しの御事や。 初はつゝ、む我が宿のさも見苦しく候へど、しばしはとまり給へや。 ワキとまる名残の儘ならば、さて幾度か雪の日の、

ツレ空さへ寒き此の暮に、 ワキいづくに宿をかり衣、 ツレ今日ばかりとまり給へや。 ワキ名残は宿にとまれども、暇申して、ツレ御出でか。 ワキさらばよ常世。 ツレまた御入り。 地自然鎌倉に御のぼりあらばお尋あれ。 けうがる法師なり。 かひがひしくはなけれども、公方の縁になり申さん。 御沙汰捨てさせ給ふな。 といひすて、出船の共に名残や惜しむらん。

後シテ
常世

後シテいかに、あれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは實か。 何夥しく上る、さぞあるらん。 東八箇國の大名小名思ひくゝの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。 白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀、かたな、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗りかへ、仲間きらびやかに打連れくゝ上る中に、常世が常にかはりたる馬物の具や打物の物、其のものにあらざる氣色、さぞ笑ふらん。 さりながら所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みか

ワキ
時頼
ツレ
近臣

狂言
從者

ねたる瘦馬の、あら道おそや。地急げども弱きに弱き柳の絲の、
 シテよれによれたる瘦馬なれば、地うてどもあふれども、先
 へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。
 ワキ、いかに、誰かある。ツレ、御前に候。ワキ、國々の軍勢ども
 は皆々來りてあるか。ツレ、さん候、悉く參りて候。ワキ、其の諸
 軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を着錆びたる長刀を持ち、
 瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方
 へ來れと申し候へ。ツレ、畏まつて候。いかに、誰かある。狂言
 「御前に候。ツレ、君よりの御諛には、諸軍勢の中にちぎれたる具
 足を着錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武士
 あるべし。急いで尋ねて御前へ參れ」との御事にて候。狂言、畏
 まつて候。いかに、申し候。シテ、何事にて候ぞ。狂言、急いで御
 前へ御參り候へ。シテ、何と、某に御前へ參れと候や。狂言、なか

なかの事。シテ、あら、思ひよらずや、定めて人たがへにて候べし。
 狂言、いや、其方の事にて候。其の仔細は、諸軍勢の中に、いか
 にも見苦しき武者をつれて參れ」との御事にて候が、見申せば其
 方程見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候
 へ。シテ、何と、たとへば、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に
 參れ」と候や。狂言、なか、の事。シテ、さては某が事にて候べ
 し。『畏まつたる』と御申し候へ。狂言、心得申し候。
 シテ、げに、是も心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御
 前に召出され、頭を刎ねられんためな。よし、それも力なし。
 いで、御前に參らんと、大床さして見渡せば、地、此の度の早
 打に上り集る兵、きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、
 其の外數人並み居つ、目をひき指をさし、笑ひあへる其の中に、
 シテ、横縫のちぎれたる、地、ふる腹巻に錆長刀、やう、に横たへ、

わるびれたる氣色も無く、参りて御前に畏まる。

ウキやあ、いかにあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそ何時ぞやの大雪に宿かりし修業者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申ししよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりとも其の具足取つて投げかけ、錆びたりとも其の長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳参すべきよし申しつる言葉の末を違へずして参りたるこそ神妙なれ。先づ、此の度の勢づかひ、全く餘の儀に非ず、常世が言葉の末、眞か偽かを知らん爲なり。又當参の人々も訴訟あらば申すべし。理非によつて其の沙汰すべき處なり。まづ、沙汰の初には、常世が本領佐野の莊三十餘郷かへし與ふる所なり。また何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば何時の世にかは忘るべき。いで其

梅田

石川縣加賀國河

櫻井

北郡梅田莊

新湯

新湯縣越後國西

彦山

蒲原郡櫻井郷彌

松井田

群馬縣上野國碓

氷郡

松井田町

上野や

上野の佐野の舟

橋とりはなし

親はさくれどわ

はさかるがへ

(萬葉集)

藤井紫影

名は乙男

兵庫縣の人

文學博士

京都帝國大學名

譽教授

の時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇の莊、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、シテ「常世は之を賜はりて、地、常世はこれを賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや、人々よ。初め笑ひしともがらも、是程の御氣色、さぞ羨ましかるらん。

地、さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、古郷へとてぞ歸りける。其の中に常世は、地、よろこびの眉を開きつゝ、今こそいさめ、此の馬に打乗りて、上野や佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵して歸るぞうれしかりける。(觀世流謠曲)

二〇 諺

藤井紫影

格言は賢哲の垂訓にして、俚諺は凡俗の信條なり。前者は明

アリストートル
ギリシャの哲
 學者（西紀前
 三八四—三二
 二）
 Aristoteles
 トレンチ
アイルラ
 ンドの宗
 教家、言
 語學者、
 詩に巧な
 り（西曆
 一八〇七
 一—一八
 八）
 Richard
 Chevenix
 Trench

らかにその立言者を求め得べく、後者は輿衆の聲にして、その作
 者を知るべからず。隨うて、その發生の時期を精確に定めんこ
 と頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、まゝその發生の時期前後
 新古の關係、變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。
 吾人が座談、演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先よ
 り知識的、道德的遺産の一部分として繼承せるものにて、吾人が
 新に製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸
 種の天然、人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮
 し、或は感激し、喜怒、哀樂種々雜多の經驗を積みて、人生に普通な
 る知識を感得して、後世子孫に遺せる者、これ即ち今日行はるゝ
 諺の多數なり。「手輕にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免
 れし古知識の斷片なり」とは、二千年の昔、俚諺研究の率先者アリ
 ストートル既に之をいへり。トレンチはその俗諺論に於て、今

日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の
 遺産にして、或は口々に語り繼ぎ、或は前代の記者によりて後世
 に書傳へられて、希臘、拉典の古きより、中世の諺に至るまで、依然
 として今日に存し諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺
 ならんと一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久
 なるを發見する事少からずといへり。現今行はるゝ我が國の
 諺にも、其の發生時代の頗る遠き物あり。「痛む上に鹽塗る」。「重
 荷に小づけ」の如きは、既に萬葉集に見え、二升榊に二升は入らぬ。
 といふは枕草紙に出て、死ぬる子みめよし。「飯粒で鯛釣る」とい
 ふは、共に早く土佐日記に見えたり。此等が孰れも千年内外の
 歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて
 豫想せざる所なるべく、今日にては既に之を徵すべき物なしと
 雖も、その淵源の遠き事、前數者に相讓らざる物尙多かるべし。

降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同一なる諺の數次第に多くなりゆくは、固よりいふ迄もなき事にて、鎌倉室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして、孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少なからず。四面海を環らし海東に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少しと雖も、支那朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來たれる諺甚だ多く、一見して外國傳來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、なほその正體は儒佛にあらざやと疑はるゝもの往々これあり。

合はせもの

「盛必有衰、合會有別離。」

(涅槃經)

仰向きて

「惡人害賢者、猶仰天而唾。」

蛙の面に

「蛙面水。」

(禪林句集)

鹿の角を

「鹿角蜂。」

(禪林句集)

渴すれども

「渴不飲盜泉之水、熱不息惡木之蔭。」

(文選)

麒麟も

「麒麟之衰也、驚馬先之。」

(戰國策)

麻につるゝ

「蓬生麻中、不扶而直。」

(荀子)

井の中の

「井蛙不可語於海、者拘於虛也。」

(莊子)

情に刃向かふ

「仁者無敵。」

(孟子)

維新後、西洋諸國との交通盛にして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。「時は金、習慣

り。殊に僧徒は布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合はせものは離れもの。」「仰向きて唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂が螫すの如き、巧に日本化せられたり。」「渴すれども盜泉の水は飲まず。」「麒麟も老いては驚馬に劣る。」「類は何人も一見して國産に非ざるを知るべきも、麻につるゝ蓬。」「井の中の蛙。」「情に刃向かふ刃なし。の如き、極めて通俗にして平易なるものが、佶偁なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。」「壁に耳」といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬于垣」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。

時は金

“Time is money.”

習慣は

“Custom is a second nature.”

二兎を “He who pursues two hares catches neither”

は第二の天性。二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。などの類即ち是なり。なほ、又人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、知識上に道德上に、新なる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

一國の俚諺は生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて、既に國民の記憶を去りたるものはた少からず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するものなり。

古來の典籍、殊にその通俗的なるものは、幾多の諺をその中に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘

り、一見その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに至る事あり。和歌俳諧俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝ物多し。和歌より來たれるものは、例へば、

山川の

空也上人繪詞傳に見ゆ

山川の末に流るゝ椽がらもみをすててこそうかむ瀬もあれ

思ふこと

後水尾院の御製と言ふ

思ふこと一つ叶へば又二つ三つ四ついつもむつかしの世や

の如き、俳諧の附句及び俳句、川柳より來たるものは、例へば、

草の名も所によりて變るなり浪花の蘆は伊勢の

救濟
室町時代の人
連歌に長ず
歿年未詳

濱荻

物いへば唇寒し秋の風

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

救濟

芭蕉

冠里

冠里
本名安藤信友
盤城平の城主
享保十七年歿
年六十二

千代
 姓は福田
 加賀國の人
 安永四年歿
 年七十四
 蓼太
 姓は大島
 信濃國の人
 明和七年歿
 年七十

王彦章
 支那 梁代の人

百なりや蔓一すぢの心より
 化物の正體見たり枯尾花
 世の中は三日見ぬ間の櫻かな
 孝行をしたい時には親がなし
 大男總身に智慧がまはりかね
 の如きものは是なり。

千代
 也
 蓼太
 川柳
 同

訓誠の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が、諺として用ゐらるゝのみならず、偉人名士の語は直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。

孔孟釋迦などの金言の如きは、いふも更なり。王彦章が「豹死留皮、人死留名」といひ、歷山大王が波斯の大軍來たり襲はんとするを聞き、自若として、「屠兒、千羊を恐れず」といひ、家康が五字七

字の戒、うへをみな。みのほどをしれ。の如き、一度此等偉人傑士の口頭を出づれば、忽ち千萬人の間に傳誦通用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が和歌に師匠なし」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に古人なし」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狭しと雖も、名人の一語世上の諺となるに至つては、其の揆一のみ。

諺は通俗を旨とすれども、必ずしも凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地たる者にして、始めて痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝」「花は櫻木人は武士」と高く標置し、「馬方船頭お乳の人」「商人の空誓文」と罵倒したるが如き、其の立言者の地位如何を察するに難からず。

詩歌格言等より來たれる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も出自の父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、饑えず凍えず、無事に成長して、世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば、諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少く、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらざやと疑はるゝもの十の七八なり。ざるを、強ひて之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損の草臥儲たる事多かるべし。

(俗諺論)

二一 川柳點

金子元臣

金子元臣
宮内省御歌所寄人
國學院大學教授
川柳點
もと柄井川柳が點をした句
柄井氏名は正通
通稱八右衛門縁亭川柳
淺草阿部川町の名主
寛政二年歿
(二四〇)

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷く。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄なる鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左に其の二三を擧げていひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下され」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。
竹の子は盜まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりくす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしをいみじき手がらのやうに驚ける人、もし此の句を見れば何とかいはん。本降になつて出でゆく雨やどり

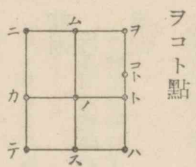
道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかききなり。塙檢校が「さてく」目あきは不由かなと、いひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

蘇東坡 宋の文豪。名は軾。洵の長子。眉山の人。英宗神宗哲宗に歴事し翰林學士兼侍講になる。(西曆一〇三六—一一〇二) いそがずばいそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるる野路の村雨



漢文に捨假名反點の左右にうるさく附纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をすゑともいはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ



柳川井柄

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかきさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のことし。あながちに此の狸をのみ笑ひ難く

や。

名物を食ふが無筆の旅日記
腹のふくる、旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

小野九太夫
假名手本忠臣藏
に出てゐる人物

戸隠
信濃國戸隠山
手力雄神を祀る

能因
後鳥羽天皇時代
の歌僧

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しにお金配分に高割を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。かくの如く川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事・傳説・史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。

鑷に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。

天日に焦して、顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物に其の沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但し袋

袋草紙
歌學者の書
藤原清輔の著

忠盛
平氏。清盛の父
(七六—一三三)

隼太
源頼政の郎等猪
隼太

盛衰記
源平盛衰記のこ
と四十八卷

頼政
源正仲の子。射
を善くし、和歌
に巧。晩年剃髮

三位入道といつ
てゐた。治承中
以仁王を奉じて
兵をあげ敗れ宇
治平等院に自双
した(八四)

時致
河津祐泰の子
祐成
時致の兄

草紙に、「一度においては實か、八十島の記を書けり」とあり。何時も室内旅行家にはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を

飛越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽・突梯、容易に及び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記の、頼政鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと、矢所さだかならず」とあり。乃ち郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあててまご／＼する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅

大磯 神奈川縣中郡大磯町
 道風 小野道風。書家三蹟の一人。
 (五六一三六)
 佐野 源左衛門常世
 戸塚の阪 相模國鎌倉郡

けつくるは曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙ませたるはこの作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が瘦馬さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大なる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞなどとの語、胸に一物ある

文王 周の武王の父
 太公望 呂尚といふ
 文王・武王を輔けた人

趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

二二 梅

藤岡 作太郎

固陰冱寒草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く標致するものは梅花にして、菊花の行く秋に後れて凋むとともに、高節遙かに群芳を抜く。牡丹は貴客、梅は隱士。彼は金屏を廻らして室の花瓶に挿みて見るべく、此は茅舍竹籬、牛の聲する邊に尋ねべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨は薔薇に比して別に特長あり。冷艶玉を綴つて楚々たり、老幹龍を横たへて偃蹇たり。清風雅韻、百花の魁たるもの、この花を措いて何かある。

支那の文人は酷だ梅花を好み、三國の末、陸凱といへる人、これを江北の友に贈つて曰く、

折梅逢驛使。

寄與隴頭人。

陸凱 吳の人
 字は敬風
 寶鼎の初相となつた人

林和靖

詩人

名は述
盧を西湖の孤山
に結んだ人
天禧四年歿
年六十二
百磯城の

もしきの大宮
人は暇あれや梅
をかざしてここ
につどへる

わが宿の
わが宿の梅咲き
たりと告げやら
ば、来ちふに似
たり散りぬとも
よし

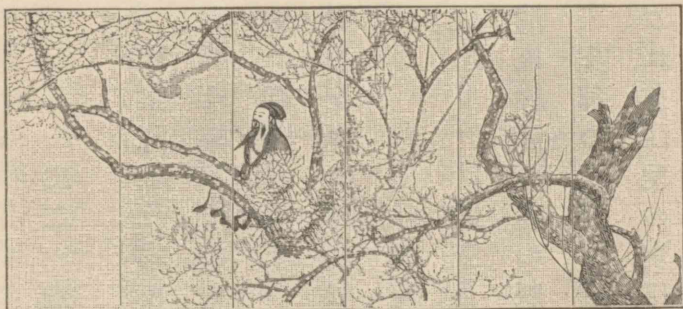
(萬葉集)

色こそ見えぬ
春の夜の闇はあ
やなし梅の花色
こそ見えれ香や
は隠るゝ

(古今集)

人はいさ心も知
らず故里は花ぞ
昔の香に匂ひけ
る (古今集)

江南無所有



林和靖 (筆翠春如川)

聊贈一枝春

宋の時、林和靖といへる高士、西湖の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へり。屢、舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至れば童子鶴を縦つてこれを報ず。その梅を詠じたる句に、「疎影横斜水清淺。暗香浮動月黃昏」といへるは、梅花詩中千古の絶唱と稱せらる。我が國に於てもすでに萬葉古今の歌集に梅花の詠多し。百磯城の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊び、わが宿の梅咲きたりと告げやれば、好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に「色こそ見えぬ香やはかくるゝ」と稱へ、或は昔ながらの花を見て「人はいさ心も

知らず」とあやぶめり。菅原道眞十一歳にして、月耀如晴雪。梅花似照星。と賦せしが、後年太宰府に左遷せられ、將に家を出でんとして、庭前の梅を眺めていはく、「こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」と。

藤原公任、亦幼にして宮中に候して、

しらくゝとしらけたる夜の月影に

雪かきわけて梅の花をる

と詠みければ、主上深く叡感まし、公任も亦生涯の思ひ出この時にありきといへりとぞ。

傳へていふ、前九年の役、安倍宗任捕虜となりて京都に入れるに、卿相雲客、奥の夷のさこそ無骨なるらめ。いざ戯れて笑はん。とて、一枝の梅を示して、「これは何ぞ」と問ふ。宗任とりあへず、我が國の梅の花とは見つれども

生田の森
今は神戸市の中
になつてゐる

荻生惣右衛門

號は徂徠

江戸の儒者

享保十三年歿

年六十三

烈公

徳川齊昭

水戸藩主

萬延元年薨

年六十一

齋藤拙堂

名は正謙

伊勢の漢學者

慶應元年歿

年六十九

大宮人はなにといふらん

と答へたるに、一座しらけて恥入りぬとなり。源平の亂、生田の森にて梶原景季、片岡の梅盛なるを手折り、箴にさして奮戦せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も身方もやさしき武士のふるまひかなと感じけりとかや。

梅が香や隣は荻生惣右衛門

とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠を、その花に喩へて賛したるもの、

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ

とは、嵐雪が窓前の南枝に日々の春を占へるなり。水戸の烈公が梅を植ゑしより、偕樂園は今に關東の名園となり、齋藤拙堂が記勝に寫されしより、月瀬は櫻の吉野と並び稱せらるゝに至りぬ。

月瀬

大和國添上郡月瀬村

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘

聲霜に冴ゆ。一陣の暗香に驚いて顧みれば、見得たり瓶中の芳姿。これ晝間の散策に竹外の一枝を手折りもて來し家づとなりけり。
(東圃遺稿)

二 菅公の左遷

時平

藤原基經の長子

延喜九年薨

年三十九

菅原のおとど

道眞

是善の子

延喜三年薨

年五十九

みかど

醍醐天皇

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くて

おはします。菅原のおとど右大臣の位にておはします。そのをりみかど御年いと若くおはします。左右の大臣の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣御歳五十七八ばかりにやおはしけん。ともに世の政うちせしめ給ひし間、右大臣は才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御

よからぬ事
時平の讒言のこ
昌泰四年
醍醐天皇の御代
(二卷)

歳も若く、さへも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ
殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、さ
るべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬ事出て来て、昌
泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。



菅原道真

この大臣の子ども數多お
はせしに、女君たちは婿取し、
男君たちは皆程々につけて
位どもおはせしを、それも皆
方々に流され給ひて悲しき
に、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、小
きはあへなんと公も許さしめたまひしかば、共に率て下り給ひ
しぞかし。帝の御掟極めて生憎あやぢにおはしませば、この御子ども
を同じかたにだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思召し

て、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

また亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑となりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく

思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給

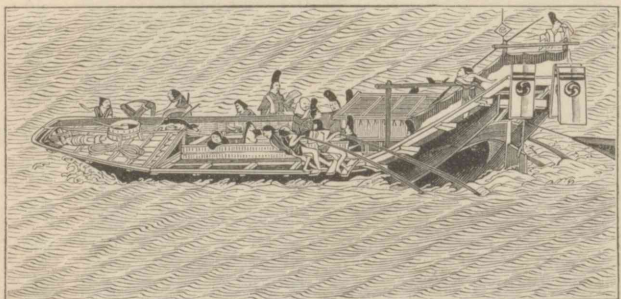
ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心

細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくも

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御宿



菅公筑紫へ渡り給ふ(松崎天神縁起繪卷)

亭子の帝
宇多法皇

山崎
山城の國乙訓郡

明石の驛
兵庫縣明石市に
舊址がある

りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。 一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるる夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそ燃えまさりけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じて、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときはなほ頼まれぬ

さりともと世を思しめされけるなるべし。 月のあかき夜、

海ならずたゝへる水の底までも

きよきこゝろは月ぞてらさん

大貳
大宰府の次官
藤原興範

文集
唐の詩人白居易
の文集



恩賜の御衣

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。 觀音寺只聽鐘聲。これは文集の白居易の遺愛寺鐘欵枕聽。香爐峯雪撥簾看。といふ詩にもまさざまにつくらしめたまへり。とこそ昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、この大臣作らしめ給へりける詩を、みかどかしこく感じ給ひて、御覽衣たまはり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞその折思召しいてて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事ども、只ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きて一卷とせしめたまひて後集と名づけられたり。又折々の歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。又雨の降る日うちながめ給ひて、
あめの下かわける程のなればや

後集
菅家後集

着てしぬれぎぬひるよしもなき

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこの松をおほさしめ給ひて、渡りすみ給ふこそは、ただいまの北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いとかしこくあがめたてまつり給ふめり。筑紫のおはしましし所は安樂寺といひて、公より別當所司などなさせたまひて、いとやんごとなし。(天鏡)

二四 流泉啄木

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の皇子兵部卿親王と申す人の子なり。よろづの事やんごとなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人、村上の御時に殿上人にてあ

北野宮

官幣中社
北野神社

安樂寺

筑紫國御笠郡太宰府村

西行法師

名は圓位、俗名佐藤義清。初め鳥羽上皇に仕へ左兵衛尉に任ぜられ、後出家し、天下を周遊し、嘯咏自適す。建久元年二月寂(七十一)。

源博雅

參議

音樂に通ず(吾
九一六四)

兵部卿親王

克明親王

醍醐天皇の皇子

逢阪の關

山城近江の國境
なる逢阪にあり

敦實親王

宇多天皇第八皇

子(吾一三三七)

りけり。

その時に、逢阪の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなむありける。この宮は宇多法皇の皇子にて、管絃の道に極まりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅、この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢阪の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の栖すまことやうなれば、行かずして、人をもちて内々に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかしと。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとてまかくても過してむ

宮も藁屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて、心に思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深し。それに盲命あらむことも測り難く、また我も命を知らず。琵琶に流泉啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯この盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが弾くを聞かむと思ひて、夜かの逢阪の關に行きにけり。されども蟬丸、その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜な夜な逢阪の盲が庵のあたりに行き、その曲を今や弾く今や弾くと密かに立ち聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかげりて、風打ち吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり。逢阪の盲今宵こそ流泉啄木は弾くらめと思ひて、逢阪に行きて立ち聞き

けるに、盲琵琶を掻き鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲ひとり心を遣りて詠じていはく、

逢阪の關のあらしのはげしきに

しひてぞゐたる世を過すとて



蟬丸 (樂一本洋筆)

し我にあらぬすき者や世にあらむ。今宵心得たらむ人の來よかし。物語せむといふを、博雅聞きて聲を出だして、王城に在る

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞き、涙を流して、あはれと思ふこと限なし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若

王城
平安城
京都の
こと

博雅といふものこそこれに來たれといひければ、盲のいはく、かく申すは誰にかおはすと。博雅のいはく、我はしかじかの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬと。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅流泉啄木の手を聴かむといふ。盲、故宮はかくなむ、彈き給ひしとて、伴の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それに近代は、げに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれあはれなる事なりかし。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の彈き給へる琵琶を聴きて、かく極めたる上手にてあり

けるなり。それが盲になりなければ、逢阪には居たるなりけり。それより後盲の琵琶は世に始まれるなりとなむ語り傳へたる
とや。
(今昔物語)

得能 文

文學博士
東京高師等範學
校教授

プラト

希臘の哲學者
アテネの人
ソクラテスの
門人

(西曆前四九
三前)

二五 眞の學人

得

能

文

プラトールがいつたやうに、人間の魂は常に本當のものを求め
て止まない。幾たびか蹉跌しながら屈せず撓まず、本當のもの
眞實なるものを喘ぎ求めるのである。かくして眞實なるもの
を欣求し智慧を欣慕することによつて、學が生じて來るのであ
る。本當のものを眞實なるものを欣求するは、人間の衷情より發
露するものであつて、何等か爲にするが如きものとは迥然とし
て選を異にして居る。それ故に眞に學にいそしむ心は、富貴功
名によつて動かされる心とは別である。富貴功名を輕蔑する

といふのではないが、これを念頭に置かないのである。随つて
貧乏もする。然しながら眞に參學究實の人に取つては、貧乏も
さほど苦にはならぬ。それよりも、本當に欣求すべき價値があ
ると思はれるものに向かつて、邁進して倦むことを知らないの
である。學は學の爲に求むべきもので、決して何等かの爲にす
べきものではない。道德に就いても亦同じ事がいはれる。道
徳は道德の爲にすべきもので、決して他のものの手段になつて
はならない。愛國者は眞に愛國の熱情に驅られて愛國的行爲
を爲すのであつて、これが自分の道德的修養の爲だと思へばそ
の目的を誤る。その他の徳に於ても同様であつて、それが自己
の修養になるなどと思へば失敗に歸するのである。
學に在つてもその通であつて、本當のものを眞正なるものを擱
みたいといふ、止むに止まれぬ衷心からの要求に驅られて出て

來るのである。決して何等か他の目的の爲に用ゐられる手段ではない。他の目的の爲にするのは學の應用であつて、學そのものではない。例へば物理學を應用して器械を造るといふが如き場合は、初から利用を目標にして居るのである。決して學そのものではない。學は自由なる精神の自發的行爲である。既に學は本當のものを擱まうとする自由なる精神の自發的行爲なるが故に、學人と物識とは異なつて居る。物識は自發的に進んで研究するといふよりも、むしろ他人の研究したものを雜然と措集するものである。即ち知識の所有者である。これに反して、學人はどこまでも進んで欣求するものである。物識の器具は記憶力であり、學人の器具は思索力である。物識は既成の知識を貯へるものであり、學人は心を虚しうして知識を求めめるものである。兩者はその態度に於て全く異なつて居る。

程伊川
名は頤
字は正叔
宋の大儒
大觀元年九月歿

程伊川曰く「多聞識者、猶廣儲藥物也、知所用爲貴」と、又曰く「學不貴博、貴於正而已」と。

されば讀書そのものは學では無い。固より讀書は先人の思想を知り、自己の趨向すべき所を知る爲に、必要缺くべからざるものであるが、その爲に讀書を以て直ちに學と同一視する事は出来ない。ましてや漫然として多讀するに於ては、精神の自發性を妨げ、思索を攪亂せしめる恐がある。これ古來屢、多讀が戒められた所以である。然し、選擇その宜しきを得て讀書に沈潜することは、學そのものの性質からして、善いことであり、貴いことである。これ昔から讀書を貴び、やがて學と同一視するやうにもなつた所以である。

學はそれ自らが目的であつて、他の目的の手段方便では無い。他のもの手段ならば、學の價値は他のものに依存することに

